

事項五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件

三五五 一月十四日

在米國石井大使ヨリ
在英國永井臨時代理大使宛(電報)

米國大統領ノ所謂國際正義ノ解釈ニ関スル前

年七月ハウス大佐トノ會談要領通報ノ件

第二〇号

(一月十五日接受)

牧野男ノ求ニ依リ客年七月八日本使發大臣宛往電第三五四号転電ス右在仏大使ヘ転電アリ度シ

本使ハ先ヅ以テ「ハウス」大佐ニ対シ大統領ハ幾多ノ機会ニ於テ國際正義(International justice)ヲ以テ将来ノ國際關係ヲ律スベキ唯一ノ綱領トスベキヲ言明シ米國民亦盛ニ之ヲ唱道セルガ右國際正義ニ関シ何人モ異議又ハ疑惑ナカルベキハ勿論ナルモ國際正義ノ解釈ハ頗ル問題タルベシ例ヘバ今回ノ戰爭前ノ狀態ハ國際正義ノ基礎トシテ動カスベカラザルモノト主張スルモノアリ實ニ内國政策ニ対シテハ外國ノ干渉スベキ限ニアラザルヲ理由トシテ露國ノ如キモ広漠タル西比利亞ヲ米國流ニ移民禁止ノ狀態ニ置クノ態度ニ出ヅルコトナキヲ保セズ右ハ全ク假定ニ過ギザルモ若シ

「ト會談中余ヨリ日本ノ将来ニ関シ満足ヲ与フルノ必要ヲ説キ出シタルニ外相ハ手ヲ拍チテ之ヲ喜ビ熱心ニ余ノ説ヲ追加布衍セリ貴大使ノ憂フル所ハ誠ニ尤ノ次第二ニ余ノ滿腹ノ賛成ヲ愛マザル所ナリ大統領ニ於テモ亦全然同感ナルコトヲ斷言シ得米國ハコノ点ニ対スル日本ノ希望ノ正当ナルコトヲ獨リ其國民ニ説クニ止マラズ歐洲諸國ニ対シテモ之ヲ説明スルノ勞ヲ惜ムモノニアラズト答ヘタリ

三五六 一月三十一日

内田外務大臣ヨリ
在仏國松井大使宛(電報)

頭山滿等國際聯盟ニ関シ人種差別撤廃ノ國民的運動ヲ計画ノ件

第二一号

頭山滿予備海軍中將上泉德弥田鍋安之助等主トナリ講和問題考究ノ為各方面ノ有志ヲ以テ組織セル使命會ハ國際聯盟ニ関シ人種の差別待遇ヲ撤廃セシムルコト我主要事項ナリトシ右貫徹ノ為國民的運動ヲ起スノ要アリトシ同會發起トナリ一月二十八日政党各派有志新聞記者及民間各種団体有志ヲ網羅シタル準備會ヲ催シ席上種々協議ノ上近日國民的大會ヲ開催スルコトヲ決議シタル趣ナリ

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三五六 三五七 三五八

各國ニ於テコノ例ニ倣フトセバ我國民ノ如キハ宇宙間ニ呼吸ノ場所ヲ得ザルコトナルベシ斯ル狀態ヲ國際正義ト看

做スニ至ラバ我國民ハ國際正義ノ名如何ニ美ナリトスルモ之ヲ承認スルコト能ハザル場合アルベシ貴見如何ト尋ネタル処大佐ハ其点ハ恰モ余ガ宿昔考慮シツツアリシ所ナリ日本ガ既往ニ於テ如何ニ公正ナル態度ヲ維持シ来リシカハ世界各國ノ認ムル所ナリ活動進取ノ氣象ニ富ム日本國民ノ前途ヲ礙ゲントスルガ如キハ自然ニ反スル愚策ト言ハザル可カラズ余ハ深ク信ズ日本ハ今ヤ其将来ヲ独逸ノ如キ純然タル軍國タラシメ長ク軍備ノ重荷ニ苦シムベキ乎又ハ英米ト提携シテ世界ニ軍國ノ跡ヲ絶チ平和ヲ樂シムノ策ヲ採ルベキ乎ヲ決スベキ分水嶺ニ在リ若シ日本ニシテ斷然吾人ト提携スルニ於テハ(彼亦日独接近ヲ憂ヒツツアルコト明ニ見エタリ)日本ガ将来活動ノ範圍ヲ擴メントスルニ方リ米國ノ反對ヲ受ケザルノミナラズ却テ米國ノ援助ノ下ニ頗ル遙ナル程度迄進ミ得ベキハ余ノ確信スル所ナリ余ガ大戰開始後始メテ英國ニ渡リ時ノ外相「サー、エドワード、グレ

三五七 二月二日

在シドニー清水總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日本ハ人種の差別待遇廢止ヲ國際聯盟ニ要求セントストノ報道ニ関シ意見上申ノ件

第一四号

(二月六日着)

凡テノ人種の差別待遇ノ廢止ヲ國際聯盟ニ要求センカ為日本ノ政治家ハ國民大會ヲ催スコトニ決定セル旨ハ痛切ニ当地人心ヲ刺激セルガ如シ卑見ニテハ世界各國ニ於テ日本人ガ對等ニ待遇セラルベキ正当ノ權利ヲ此際強硬ニ主張シ必ズ其貫徹ヲ期スルニ止メ一般ノ人種問題トシテ提議スルヲ避ケ速ニ其主意ヲ世界ニ明示スル方機宜ヲ得タル策ナリト確信ス偏ニ御英斷ヲ請フ若シ新聞電報ガ誤ナリトセバ公然正誤シタシ何分ノ義御回訓ヲ請フ

三五八 二月四日

在紐育矢田總領事ヨリ
内田外務大臣宛

紐育在留日本人ヨリ國際聯盟規約中二人種の又ハ宗教的差別待遇禁止ノ条項ヲ設クル様日本講和全權ニ電請ノ件

附屬書 右電文

機密公第二号 (三月十日接受)

大正八年二月四日

在紐育 総領事 矢田長之助(印)

外務大臣子爵 内田 康哉殿

当市在留代表の日本人別紙ノ通り決議ヲ為シ在巴里本邦講和使節へ電送方依頼有之候ニ付右本日附ヲ以テ在仏大使經由(暗号、電信番号第一〇号及第一一号)及電送置候ニ付為御参考右原文写致ニ差進候条御査閲相成度候 敬具

本信写送付先 在米大使

(附屬書)

紐育在留日本人ヨリ日本講和全権宛電文

“We respectfully urge you to propose as one article of Constitution of League of Nations the following: ‘All nations without regard to race, color or creed have and are assured of equal rights.’ Our chief reason for this request is that in our opinion the solemn declaration of this undisputed fact will prevent future troubles which is the main purpose of the League of Nations. Nagashima Ruzi left January 31 per SS CARONIA carrying this message,

but for fear of delay we send this cablegram. As to the scope and phraseology of the article we respectfully submit to your discretion.”

(signed) Arai, Ichinomiya, Horikoshi, Hamaoka,

Den, Seko, Yamamuro, Imamura, Tetsuka,

Fukushima, E. Takamine, Mutoh, Yasuda,

Kamei.

三五九 二月五日 内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛(電報)

日本ノ南洋占領地領有問題人種の差別待遇ノ撤廃問題労働ノ國際的自由ノ問題其他ニ関スル議會及議員ノ論議通報ノ件

講第三二号

一、講和會議ノ消息追々報道セラルルニツレ時局ニ対スル民間ノ注意一層緊張シ来レル処二月四日ノ議會ニ於テ帝國ノ南洋占領地領有ハ列國異議ナキ所ト思惟シ居タルニ今ヤ独領殖民地國際管理案等我ニ不利ナル議論ヲ聞キ憂慮ニ堪ヘズ之ニ処スル帝國政府ノ方針説明アリ度旨憲政会ヨリ緊急質問提出セラレ政府ハ何等公表ノ時期ニアラズト答弁シ

タルガ同会一部有志者ハ我南洋占領地ノ永久領有及國際聯盟ニ関スル人種の差別待遇ノ撤廃労働ノ國際的自由並ニ労働組合ノ公認等ノ貫徹ヲ期スル為結束運動スヘキ旨決議セリ

二、今期議會ノ案件タル選挙権拡張案ニ関シ最近民間諸方面ニ於テ普通選挙制実施ヲ論スルモノ多キヲ加ヘタル処二月四日憲政会代議士河野、尾崎、島田等ヲ初メ有志者会合シ普通選挙ノ実現ヲ期スル旨申合ヲナシ国民党有志者モ同日同党幹部ニ意見書ヲ提出シテ其反省ヲ促シ同党提出ノ拡張案ヲ撤回シテ普通選挙案採用方ヲ求メ又政友会有志者モ同じク幹部ヲ促シ黨議トシテ普通選挙案ヲ纏メシムルコトニ努メ國論作興ニ尽力スヘキ旨ノ申合ヲナシタリ

三六〇 二月六日 内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛(電報)

人種の差別撤廃期成大会ニ於テ宣言及決議満

場一致可決ノ旨通報ノ件

第六〇号

往電第二二号ニ関シ二月五日人種の差別撤廃期成大会開催貴族院及政友、憲政、国民三黨以下各団体有志三百余名出

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三六〇 三六一

席満場一致ヲ以テ宣言書並決議ヲ可決シ直ニ貴官等本邦全権委員及講和會議議長クレマンソー氏宛打電セリ

三六一 二月八日 内田外務大臣ヨリ
西園寺全権宛(電報)(巻)

人種の差別撤廃期成大会ノ決議、選挙法改正

案等ニ関シ通報ノ件

第一二号

(一)政友憲政国民三黨外二十四団体有志主催ノ人種の差別撤廃期成大会ハ五日午後五時ヨリ築地精養軒ニ於テ開会杉田定一、河野広中、島田三郎、大木遠吉伯、津軽秀磨伯等三百余名出席、杉田定一座長ト為リ宣言及決議ヲ為セリ其ノ要旨ハ人種の差別ハ単ニ自由平等ノ大義ニ悖ルノミナラス國際紛糾ノ禍根ヲ貽スモノナルヲ以テ正義人道ノ本義ヲ徹底シ世界永久ノ平和ヲ確立スル為世界ノ公議ニ懇ヘ其ノ目的ヲ達セムコトヲ期スト謂フニ在リテ其ノ実行ヲ期スル為当局ヲ歴訪シ尚其ノ趣旨ヲ在巴里本邦全権委員竝「クレマソウ」議長ニ打電スルコトヲ可決セリ

(二)議會ハ平穩逐日議事進行中ナルガ選挙法改正ニ関シ普通選挙制ヲ採ラムトスルモノト階級制ヲ採ラムトスルモノト

ノ間ニ議論沸騰シツツアルガ政府ハ選舉權ヲ三円以上ノ納税者ニ附与シ小選舉区制ヲ採用シ定員約八十名ヲ増加スルノ案ヲ議會ニ提出ノコトニ決セリ

(三) 来ル十一月一日紀元節ヲトシテ憲法發布三十年記念祝賀會ヲ青山憲法記念館ニ於テ催ス予定ナリ当日午後天皇陛下臨御遊ハサレ諸外国使臣高官貴衆兩院議員幾百名參列スヘシ

註 右電報ハ西園寺全權搭乘ノ丹波丸ニ電送セラレタリ丹波丸ハ二月九日コロンボ着翌十日同港発

三六二 二月十二日 内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛(電報)

人種的差別撤廃期成大会ヨリ宣言決議ヲ日本

全權ニ打電方依頼アリタル旨通報ノ件

附記 二月六日附東京日日新聞記事

第七二号

往電第六〇号ニ関シ陸軍中將佐藤鋼次郎氏来省左ノ宣言決議ヲ帝國全權委員ヘ転電方依頼アリタリ

宣言

今ヤ聯合列国ガ講和會議ニ於テ國際聯盟ヲ設ケ世界永久ノ平和ヲ図ラントスルハ日本國民ノ満腔ノ賛意ヲ表シ其成立

廢期成大会は五日午後五時より築地精養軒に於て開会杉田定一、河野広中、島田三郎、大木遠吉伯、津輕秀磨伯、小川平吉、佐藤鋼次郎、上泉徳弥、副島義一、松田源治、下岡忠治、大竹貫一、内田良平、五百木良三、田鍋安之助氏等三百余名出席大竹貫一氏開会の辞を述べ杉田定一氏を座長に推し議事に移り先づ左の如き宣言及決議を満場一致を以て可決せり

中略(註)

次で右宣言及決議事項の貫徹を期する為の実行方法として(一)当局を訪問して右趣旨を陳述する事

(二)宣言及決議を在巴里本邦全權委員並に講和會議々長クレマンソー氏に打電する事

の二項を可決し実行委員として次の諸氏を座長より指名せり

頭山満(有志) 田中舎身(浪人会) 副島八十六(日印協
會) 大久保高明(日本移民協会有志) 水野梅曉(日本国民協會) 宮島大八(丙辰會) 和田幽文(東京仏教護國團) 中村啓次郎、松田源治、林毅陸(立憲政友會) 伊東知也、西村丹治郎、松村恒一郎(立憲国民党有志) 橋本五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三六二

ヲ切望シテ已マザル所ナリ然ルニ從來國際間ニ行ハレタル人種的差別待遇ハ単ニ自由平等ノ大義ニ悖ルノミナラズ將來國際紛糾ノ禍根ヲ貽スモノニシテ之レヲシテ依然存続セシメン乎假令ヒ百千ノ盟約ヲ重スト雖モ要スルニ沙上ノ樓閣ト一般世界ノ平和ハ到底得テ望ムベキニアラズ依テ吾人ハ此機會ニ於テ正義人道ノ本義ヲ徹底シ世界永久ノ平和ヲ確立スルガ為メ世界ノ公議ニ懇ヘ其目的ヲ達成センコトヲ期シ茲ニ左ノ決議ヲ為ス

決議

日本國民ハ講和會議ニ於テ從來國際間ニ行ハレタル人種的差別待遇ヲ撤廃セシムルコトヲ期ス

右決議ス

大正八年二月五日

人種的差別撤廃期成大会

(附記)

大正八年二月六日附東京日日新聞記事

人種差別撤廃大会

宣言決議実行方法

政友憲政國民三党以下卅七団体有志聯合主催の人種差別撤

徹馬(立憲青年党) 岡野碩(大日本國防議會) 中西正樹(对支聯合會) 櫛部荒熊(対外同志會) 満川亀太郎(大日本社) 森伝(大日本興國青年會) 押川方義(無所属団有志) 大竹貫一、岡部次郎、小泉又次郎(憲政會有志) 佐々木安五郎(國民外交同盟會) 五百木良三(國民義會) 葛生能久(黒竜會) 有吉鷗外(國士會) 長山乙介(交信會) 池谷源一(皇國青年會) 土倉宗朝(鉄心會) 佐藤鋼次郎(在郷陸軍有志) 上泉徳弥(在郷海軍有志) 伯爵大木遠吉(貴族院議員有志) 秋田清(新政會有志) 中島氣崢、松田禎輔、安藤正純、若宮卯之助(新聞記者有志) 田鍋安之助(使命會) 大川周明(全亞細亞會) 三浦逸平(桜田俱樂部)

次で各団体有志代表の演説に移り有志団を代表する田鍋安之助氏、在郷海軍有志を代表せる上泉徳弥中將の演説ありたる後佐藤鋼次郎中將(在郷陸軍有志代表)は

人種的差別待遇の撤廃は事理極めて明白にして我が日本人は世界有色人種中の先輩として此問題に発声を取ることは極めて喫緊事に属するに拘らず世論が毫も緊張を示さざるは何ぞや蓋し其原因二あり一は無知即ち有色人種

が白人人種より如何に不公平なる差別待遇を受け居れるやの实情を知らず之を対岸の火災視して冷淡に看過するものは無氣力即ち他の鼻息を窺ひて思ふことを得言はず氣兼苦勞して此大問題を曖昧模稜の間に葬るをも辞せざらんとするもの最も憎むべきに属す見よ政友、憲政、国民党の首領たる原、加藤、犬養諸氏は本夕の如き重大なる会合を雲煙過眼視し出席だもせざるに非ずや又先日某席上にて最近米国より帰朝せし一外交官の演述を聞きしが曰く先づ國際聯盟の成立を賛成し成立後徐々に人種的差別撤廃を求むべしと当時予は一辞を賛せざりしも此の如きは我が退嬰的外交を最も雄弁に語るものにして予は此の如き説を排し聯盟成立前に人種的障壁撤去を要求せんことを主張す

と云ひ夫より田中弘之氏（宗教界有志代表）の演説あり次で副島義一博士は学界有志を代表して

國際聯盟成立後其実権を握る者は即ち現に聯盟を主張するものなれば彼等の正義標準と我等の夫れは異なるやも知れず安んじて人種平等の事を聯盟成立後に譲り難し否極

に対する忠誠を醸へさず大兵を歐洲戦場に送れり白人必ずしも白人と相善からず異人種と協同して同人種を撃つ種族的偏見は崩壊分解して既に久しきに非ずや日本が此の如き趨勢を觀取し正々堂々の理由を以て此要求を為すは当然の順序なり

と演説し大喝采を博し座長発声にて万歳を三唱して開宴、席上佐々木安五郎外数氏の卓上演説ありて午後八時散会せり因に大会宣言及決議は直に在巴里本邦全権委員並に會議々長クレマンソー氏に打電（仏人ポール、リシャル氏仏訳）せられたり

註 中略ノ部分ハ前掲ノ宣言及決議ト同文ナリ

三六三 二月十五日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

聯盟規約中二人種差別撤廃規定挿入方ノ我方
提案ヲ委員会ニ於テ審議ノ件

別 電一 二月十四日松井大使発内田外務大臣宛電報講
第一三三号

二月十三日國際聯盟委員会ニ於ケル牧野委員
五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三六三

端なる場合を想像すれば聯盟の名に於て不正義の行はるるあるやも知れず我等をして此疑念を去らしむる為先づ人種的偏見を去らんことを求むべし予は此見地よりして人種的差別撤廃を以て我邦の國際聯盟賛成の条件となすべきことを主張す

と述べ夫より安藤正純氏（新聞界有志代表）大木遠吉伯（貴族院議員有志代表）西村丹治郎氏（国民党有志代表）松田源治氏（政友会有志代表）等の演説あり最後に島田三郎氏（憲政会有志代表）は

人種的差別撤廃は自明の理にして説明迄もなし之を今日に主張するは事理の宜しきを得且世界の大勢よりして絶好の機会を捉へ得たるを思ふ元來異人種嫌惡は白人の偏見にして日清戦後に於ける露独仏三国の我邦に対する干渉は此迷信を端的に表明せるものなりしが今日に及びて形勢大に變じ仏国は我國を包容せる聯合与国の一国として同人種たる独逸を撃ちつつあり又大正三年大戦勃発前三箇月有名なる駒形丸事件に依りて英國を憎みし印度人もハーディング卿の妥當なる声明並に政策によりて英國

ノ演説

二 二月十五日松井大使発内田外務大臣宛電報講
第一四九号

二月十四日午後總會ニ於ケル牧野委員ノ演
説

講第一四八号

國際聯盟ニ付具體的提案成立スヘキ形勢ヲ見ルニ至ラハ人種的偏見ヨリ生スルコトアルヘキ帝國ノ不利ヲ除去セムカ為事情ノ許ス限適當ナル保障ノ方法ヲ講スルニ努ムヘキ旨予テ御訓令ノ次第アリタル処右ノ如キ提案成立スルノ形勢トナリタルヲ以テ保障ヲ得ヘキ方法ニ付熟慮ノ上先ツ英米側ト内談ヲ遂ケ置クヲ必要ト認メタル処我々希望ノ貫徹ニ故障トナルヘキハ主トシテ米國側ナルヘキハ問題ノ性質上推斷ニ難カラザルヲ以テ本委員等ハ先ツ「ハウス」大佐ニ内交渉ヲ試ミタル結果同大佐ハ意外ニモ我ニ対シテ多大ノ好意ヲ示シ舊ニ我提案ニ対シ賛成ノ私見ヲ明言シタルノミナラズ大統領ニ於テモ同意ヲ表シ且我方ニ於テ希望スル場合ニ於テハ本案ハ之ヲ大統領ノ提案トシテ委員会ニ提出スルモ可ナリトノ意ヲ洩ラシタリ右提出方法ハ自ラ得失アル間

題ナルモ結局提案ノ通過ヲ謀ルノ見地ヨリスルトキハ之ヲ採用スル事得策ナリト認メタルヲ以テ本委員等ハ同大佐ノ提言ニ同意シ其配慮ヲ依頼シタリ而シテ同大佐ニ於テ大統領ト協議ノ結果左記ノ如キ意味ノ案即チ The equality of nations being a basic principle of the League of Nations, the High Contracting Parties agree that concerning the treatment of aliens in their territories, they will accord them, as soon and as far as practicable, equal treatment and rights, in law and in fact, without making any distinction on account of their race or nationality. ノ規定ヲ國際聯盟規約中ニ挿入スルコトヲ大統領提案トスルキ事ニ異存ナシトノ意向ヲ示シタリ(交渉ノ曲折ニ付テハ別電ヲ以テ詳報ス)本案提出ノ方法前陳ノ如ク内定シタルヲ以テ我ニ於テ英國側ニ対シ直接開談ヲ試ムルコトヲ避ケ暫ク米英間内交渉ノ結果ヲ俟ツベキコトトセリ然ルニ英國側ハ「ダニニオン」ヨリノ反対アリタル為ニヤ容易ニ本案ニ対シ同意ヲ表スルニ至ラズ不得止ハウス大佐ト熟議ノ上我ヨリモ「セシル」卿及「バルフォア」氏ニ対シ累次交

渉シタルモ何分我希望ニ応ズルノ困難ヲ訴ヘ終ニ人種問題ハ國際聯盟ト直接ノ關係無ク随テ之ニ關スル規定ハ聯盟ノ規約中ニ掲ケヘキモノニ非ズトノ理由ヲ以テ我希望ニ応スルコトヲ肯ゼズ英國側ノ態度此ノ如クナル以上ハ我希望ヲ貫徹スルコト困難ナルハ殆ト明瞭トナリタルモ成否ハ兎モ角此際本問題ニ対スル我主張ヲ闡明スルコト將來ノ為極メテ緊要ノ一儀ト信セルヲ以テ前記協定案ニ修正ヲ加ヘタル上二月十三日午後ノ委員会ニ於テ第二十一条(往電七四号第十九条ニシテ其後修正ヲ經テ第二十一条トナレリ)ノ規定即チ The High Contracting Parties agree that they will not prohibit or interfere with free exercise of any creed, religion or belief whose practices are not inconsistent with public order or public morals, and that no person within their respective jurisdictions shall be molested in life, liberty or pursuit of happiness by reason of his adherence to any such creed, religion or belief. ノ次ニ The equality of nations being a basic principle of the League of Nations, the High Contracting Parties agree

to accord, as soon as possible to all alien nationals of States members of the League equal and just treatment in every respect, making no distinction, either in law or in fact, on account of their race or nationality ノ一項ヲ加ヘムコトヲ提議シ牧野委員ヨリ別電第一二三号ノ如ク陳述シテ提案ノ通過ニ努メタルモ議長ロバート・セシル卿(ウィルソン大統領ハ五大国會議ニ出席ノ為委員會ヲ欠席セリ)ハ本件ハ種々ノ方面ニ影響アル極メテ困難ノ問題ニシテ激烈ナル論争ノ目的物タリ随テ本件規定ヲ聯盟規約中ニ加フルコトハ之ヲ避ケタキ旨ヲ力説シ希臘委員「ヴェニゼロス」ハ人種的區別ノ問題ハ今次戦争ノ結果其ノ解決ヲ早ムヘキハ勿論ナルモ直ニ之ヲ解決セムコトハ困難ナルヘシ但シ宗教ニ關スル事項ヲ規定スル以上人種ニ關スル規定ヲ挿入スルコトヲ拒ムノ理ナク寧ロ兩者ニ關スル規定ハ共ニ之ヲ設ケザルコト然ルヘシト述ヘ白耳義委員「イマンズ」ハ最初ハ兩者共ニ削ルカ又ハ兩者共ニ存スルノ外ナカルヘク尤モ日本委員提案ノ如キ案文ニテハ考ヘ物ナリト述ヘタルカ後ニ至リ日本ノ案ニハ反対スト明言セリ又ブラジル、ルーマニア及チェックスロヴァック各委員ハ人種ニ關スル

規定ヲ設クルハ必ズシモ不当ニアラズト意見ヲ述ヘ仏國委員ハ両問題ハ互ニ関連シ居リ宗教ニ關スル規定ヲ置クトスレハ人種ニ關スル規定ヲモ加フルコト或ハ然ルヘキモ此際ハ兩者共削除シタシト述ヘ支那委員ハ本件ニハ支那モ利害關係ヲ有シ随テ日本ノ提案ニハ同情ヲ表スル次第ナルモ未タ政府ノ訓令ヲ得サルニ依リ意見ヲ述フルコトハ後日ニ留保スト述ヘタリ茲ニ於テ「セシル」卿ハ第二十一条ヲ削除スルノ案ニ付會議ノ意見ヲ問ヒ多数之ニ賛成セリ然ルニ「ハウス」大佐ハ宗教ニ關スル規定ハ「ウィルソン」大統領ノ重キヲ置ケル簡条ナルヲ以テ之ヲ削除スルニハ一応大統領ノ意見ヲ確メタク万一大統領ニ於テ此カ維持ヲ主張スル場合ニハ更ニ委員會ヲ開催スルコトトシ削除ニ同意シタル場合ニハ二月十四日午後總會議ヲ開キテ「ウィルソン」大統領ヨリ委員會ノ成案ヲ會議ニ提出シ討議ハ後日ニ譲ルコトトスヘキ旨ヲ述ヘ同日ノ會議ヲ終リタリ「ウィルソン」大統領ハ委員會多数ノ意見ヲ容レ第二十一条削除ニ同意シタリ十四日午後總會議ニ於テ大統領ヨリ別電第一四〇号ノ成案ヲ提出シテ一場ノ演說ヲナシ「セシル」卿「オルランド」氏「ブルジョア」氏等交々慶賀又ハ希望ヲ陳ベタ

ルヲ以テ我ニ於テモ此機会ヲ捉ヘ本案再提出ノ素地ヲ作り置クコト必要ト認メ牧野委員モ往電一四九号ノ通り規約案ノ成立ニ付祝意ヲ述ブルト同時ニ後日會議ニ出スヘキ提案有ルニ付好意ヲ以テ慎重考慮セラレムコトヲ希望スル旨ヲ附言シ我地歩ヲ留保シ置キタリ
在英、米、伊各大使ヘ転電セリ

(別 電 1)

二月十四日在仏国松井大使発内田外務大臣宛電報講第一三三三号
二月十三日國際聯盟委員會ニ於ケル牧野委員ノ演説
講第一三三三号

Additional clause I am about to propose, I consider as coming appropriately under Art. 21. It is not necessary to dwell on fact that racial and religious animosities have constituted fruitful source of trouble and warfare among different peoples throughout history, often leading to deplorable excesses. This Article, as it stands, attempts to eliminate religious causes of strife from international relationship, and as race question is also standing difficultly which may become acute and dangerous at any

to uncontrollable degree, and it is hoped that matter be taken in hand on such opportunity as present. What was deemed impossible before is about to be accomplished. Creation of this League itself, which efforts of many generations of best minds failed to accomplish, is a notable example. If this organisation can open a way to solution of question, scope of the work will become wider and enlist interest of still greater part of humanity.

It must be admitted, at same time, that question of race prejudice is very delicate and complicated matter, involving play of deep human passion and therefore requiring careful management. This consideration has not been overlooked from practicable point of view, and immediate realisation of ideal equality of treatment between peoples is not proposed. Clause enunciates principle of equality and leaves out working of it to hands of responsible leaders of States members of League who will not neglect state of public opinion. This clause, in a way, may be regarded as invitation to governments

moment in future, it is desirable that provision should be made in this Covenant for treatment of this subject. It would seem matters of religion and race could well go together. I wish to add clause:

The equality of nations being a basic principle of the League of Nations, the High Contracting Parties agree to accord, as soon as possible, to all alien nationals of States members of the League equal and just treatment in every respect, making no distinction, either in law or in fact, on account of their race or nationality;

directly after end of Art. as it stands. That race discrimination still exists, in law and in fact, is undeniable, and it is enough here simply to state fact of its existence. I am aware of difficult circumstances that stand in way of acting on principle embodied in this clause, but I do not think it insurmountable if sufficient importance is attached to consideration of serious misunderstanding between different peoples which may grow

and peoples concerned, to examine more closely and seriously, and to devise some acceptable means to meet deadlock which at present confronts different peoples.

As result of this war, wave of national and democratic spirit has extended to remote corners of world, and has given additional impulse to aspirations of all peoples; this impulse once set in motion as part of universal movement, with renewed strength, cannot be stifled, and it would be imprudent to treat this symptom lightly.

There are other considerations of more direct nature which merit earnest thought. Future States members of League, comprising all kinds of races, constitute great family of nations, it is in a sense a world organisation of insurance against aggression and war. If one member's independence and political integrity is menaced by third power, nation or nations suitably placed must be prepared to take up arms against aggressor, and there are also cases of enforcing common obligation which would

entail contribution of armed force. These are indeed serious obligations which each State member, in accordance with their capability and power, mutually pledge themselves, and must be prepared to fulfil them for benefit of their brother nations. This means that citizen of one nation must be ready to share military expenditure for common cause and, if needs be, defend other peoples by his own person. Seeing these new duties arising before him as result of his country's entering League, each national would like to feel and in fact demand that he should be placed on equal footing with people he undertakes to defend even with his life.

In this war, to attain common cause, different races have fought together on battlefield, in trenches, on high seas, and they have helped each other and brought succour to disabled and have saved lives of their fellowmen irrespective of racial differences, and common bond of sympathy and gratitude has been established to extent never before experienced. I think it only just that

future generations will pay their benefactors.

As I understand there is to be no discussion today on the contents of the draft I confine myself to the few remarks I have made, reserving until a later stage of the discussion of this project, certain proposition, which I will have the privilege of submitting to this conference and for which I ask favourable and careful consideration of the distinguished representatives of the nations assembled here today.

Matsui

三六四 二月十六日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種的差別撤廃条項ヲ國際聯盟規約ニ加フル

コトニ關スル英米トノ交渉経緯報告ノ件

別電 二月十六日在仏国松井大使発内田外務大臣宛電

報講第一五六号

人種的差別待遇撤廃ニ關スル条項ノ甲案

講第一五五号

國際聯盟ニ關スル御訓令貫徹方ニ就テハ往電講第一四八号
具報ノ通先ヅ米國委員ト妥協ヲ遂グルノ必要ヲ感シ此目的

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三六四

after this common suffering and deliverance principle at least of equality among men should be admitted and be made basis of future intercourse.

Matsui.

(別電11)

二月十五日松井大使発内田外務大臣宛電報講第一四九号

二月十四日午後総會議ニ於ケル牧野委員ノ演説

講第一四九号

I beg to add another voice to echo the congratulatory speeches that have been made on the termination of perhaps the most important document that has ever been compiled by the hand of man. The great leaders with staunch purpose, who have identified themselves with the movement, involving the most intricate political problems of diverse nations, deserve gratitude from mankind for successfully piloting to the last stage, the work of establishing the most effective instrument for the maintenance of peace. Their names will be indelibly written on pages of history and that will be the grateful acknowledgement of indebtedness which the present and

ノ為ニハ成ルベク速ニ「ハウス」大佐ト談合スルヲ最モ有
効ト認メタルモ同氏病余休養中ナリシ為不得止珍田委員ハ
牧野委員ノ旨ヲ承ケ単ニ瀕踏ノ目的ヲ以テ一月廿六日國務
卿ヲ往訪シ國際聯盟ニ對スル我態度ヲ抽象的ニ説示シ米國
側ノ意嚮探知ヲ試ミタルニ同卿ノ応答ハ極メテ友好的ナリ
シモ實際ニ亘リ何等捕捉スベキ点ヲ示サズ不得要領ニ終リ
タルガ唯會談中國國際聯盟問題ニ關シ大統領ニ於テハ貴下ト
會見ヲ希望シ居レリ云々ト申述べタルニ付何時ニテモ參趣
スベキ旨答ヘ置キタリ翻ツテ往電講第二八号具報ノ大統領
ノ態度ト右希望トヲ綜合スルトキハ大統領ニ於テハ本問題
ニ對スル我態度ニ不慚不安ヲ懷キ何トカ妥協ノ道ヲ講ゼム
トスルノ底意ヲ有スルニ非ズヤト想像スベキ節ナキニ非ザ
ルガ故ニ本委員等ハ益々對米内交渉ノ必要及得策ヲ感ズル
ニ至レリ然ルニ爾後大統領ハ激務ニ忙殺セラレ居ル模様ニ
テ會見ノ時日ヲ指定シ来ラザル内一面ニ於テハ本問題ノ協
議會ハ愈々二月二日ヲ以テ開始セラレ「ハウス」大佐ノ出
席ヲ見ルニ至リタルヲ以テ二月四日牧野、珍田兩委員ハ同
大佐ヲ往訪シ先ヅ大体ニ於テ本問題ニ對スル我態度ヲ説示
シタルニ同大佐ハ頗ル同情的所見ヲ披瀝シ依然トシテ客年

七月八日石井大使ト会見當時ノ態度ヲ持續シ居ルコト明瞭トナリシヲ以テ我ニ於テモ御訓令ノ要領ヲ内話シ妥協ノ為試ミニ甲乙二考案(甲ハ別電第一五六号ノ通、乙ハ往電講第一四八号記載案文中 as soon……as practicableノ代リニ as far as it lies in their legitimate powers トアルモノナリ)ヲ提議シタルニ甲ニ對シテハ一言ノ下ニ反對シタルモ乙ニ對シテハ唯一己ノ私見トシテ賛成ノ意ヲ表シタルノミナラズ大統領ニ於テモ同意ヲ表スルナラン我方希望ノ如何ニ依リテハ之ヲ大統領ノ提案トシテ提出スルモ可ナリトノ意見ヲ附言シ結局既電ノ通此ノ提出方ニ依ルベキコトニ談合セリ翌五日ニ至リ「ハウス」大佐ハ右案文中 as far as it lies in their legitimate powers トアルヲ as soon and as far as practicable ト大統領自身ニ改竄ヲ加ヘ同意ヲ表シタル趣並ニ英國側ニ交渉ヲ試ミタルニ意外ニモ大体ニ於テ不同意ナキ旨ヲ述ベタルモ右ハ即坐ノ答ナレバ或ハ熟考ノ末反對ニ出ヅルヤモ計リ難シト語ラレタリ隨テ英國側ニ對シテハ我ヨリ直接ノ交渉ヲ避ケ事ヲ英米間内談ノ結果ヲ俟ツコトトシタルモ爾來英國側ノ反對追々其鋒芒ヲ露ハスニ至リ「ハウス」大佐トモ協議ノ結果我ニ於テモ直接交

在英、米、伊各大使ヘ転電セリ

(別電)

二月十六日松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一五六号

人種の差別待遇撤廃ニ関スル条項ノ甲案

講第一五六号

Art. 20. Equality of nations being a basic principle of the League, the H. C. P. agree that concerning treatments and rights to be accorded to aliens in their territories, they will not discriminate, either in law or in fact, against any person or persons, on account of his or their race or nationality. Matsui.

三六五 二月二十五日

在シドニー清水総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日本人ノ世界各国ヘノ自由入国要求問題ニ関

スル一雜誌ノ論評報告ノ件

第一九号

(二月二十六日接受)

Melbourne Steads Review ハ本月二十二日発刊隔週紙上 Japan Demands Free Ingress ナル題下ニ大要左記ノ批評ヲ為セリ

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三六五

涉ヲ試ムルノ必要ヲ認メ本問題ノ主任タル「セシル」卿並ニ「バルフォア」氏ト累次会見ヲ遂ゲ出来得ル限り提案ヲ軟化シテ切ニ其互譲ヲ求メタルニ拘ラズ両氏ノ応答ヲ約言スレバ個人トシテハ充分ニ我方ノ立場ヲ諒トスルモ問題頗ル重大ニシテ全然訓令ノ範圍ヲ超越スルノミナラズ元來國際聯盟ノ規約ニ於テ信教ノ自由及人種ノ對等ト云フガ如キ問題ヲ規定スルハ頗ル妥当ヲ欠クノ措置ナリトノ意見ヲ固持シ飽迄反對ノ態度ニ出デ加之「セシル」卿ノ如キハ如此重要問題ハ多数ヲ以テ決スベキモノニアラズトノ意見ヲ把持セルヲ以テ硬軟如何ニ拘ラズ本案ノ通過ハ絶望ノ外ナキ狀況ニ陥リ不得止更ニ米國側ト談合ノ結果往電講第一四八号具報ノ如キ成行ヲ見ルニ至リタルハ本委員等ニ於テ遺憾トスル所ナリ英國側反對原動力ノ植民地首相ニ在ルハ推斷ニ難カラザル所ナルヲ以テ此上ハ本委員等ニ於テ「ヒューズ」「ボルデン」両氏ニ對シ極力遊説ヲ努ムベキ心算ナルモ目的ノ貫徹ハ至難ノ業ニシテ十否中僅ニ一成ヲ期スルノ外ナク愈々不成功ニ終ル場合ニ於テハ単ニ我主張ヲ闡明スルノ趣旨ヲ以テ適當ノ機會ニ於テ更ニ往電講第一四八号末段ノ案ヲ提出スル覚悟ナリ右具報旁御承認ヲ請フ

日本人カ世界各国ニ自由ノ入国ヲ要求センコトハ夙ニ予期セラレタル所ニシテ之ヲ拒絕スルコトハ極メテ難事タリ日本ハ英仏米伊ノ諸國トアラユル方面ニ於テ均等ナル同盟國ニシテ講和會議派遣ノ日本使節ハ五大國ノ一ニ列シ國際聯盟ノ最高評議會ニ於テ其一位ヲ占ムルニ當リ其ノ國民ニ對シ同盟國內ノ領土ニ入國ヲ拒ムカ如キハ全然不合理タルコト極メテ見易キ所ナルヘシ日本ノ本件運動ヲ以テ Wilsonism ト Realism 換言スレハ新旧政治思潮ノ衝突ニ関スル一行動タリト解スルモノアルモ決シテ真相ヲ穿チタルモノニ非ズ是非トモ該問題ノ本体ニ就キ解決ヲ要スル事件ナリトス講和會議ニテ之等ノ難件ヲ解決スルニハ交譲妥協ノ外方策ナカルヘシ故ニ列國ハ日本ノ要求ノ正当ナルヲ容認シ之ト同時ニ相互ノ妥協ニテ日本政府ハ現今日本移民ヲ許サザル諸國ニハ今後モ移民ニ旅券ヲ支給セザルノ取極ヲ為スノ外ナカラン云々

又同雜誌ニハ南洋諸島研究家 Thomas J. Mc Mahon カ实地調査ノ上起稿シタル The Japanese Occupation of the Marshall Islands ナル論文ヲ載セ土人ノ文化教育衛生及産業奨励等ニ関スル我民政ノ治績ニ就キ口ヲ極メテ賞讃シ土

人ハ其ノ治下ニ悦服勉勵セルニ因リ若シ該群島カ日本ノ保護領トナラバ小型ノ新日本ヲ現出シ産業發達住民繁榮ノ一地域タルニ至ル可キ次第ヲ詳説セリ
在英大使へ電報セリ

三六六 二月二十八日 在瑞西国本多公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種問題ニ関シユダヤ人ノ言論機關其他ヲ利用スル意向無キヤ牧野全權ニ問合セタル件

第七八号

本使發在仏大使宛講第六六号貴大臣御含迄ニ転電ス
牧野男へ

講和會議ニ於テ帝国全權ヨリ人種問題ニ関シ提議アリタルコトハ当国ハ勿論独逸國ノ新聞紙ニモ掲載セラレタル処該問題ニ関シ利害關係ヲ有スルハ猶太人ノミナラズ匈牙利勃牙利土耳其人等有之若シ帝国全權ニ於テ本問題ニ関スル我主張支持ノ一手段トシテ多少プロバガンダヲ為スコト可ナリトノ意嚮ヲ有セラルルニ於テハ前記各人ノ有スル言論機關ヲバ或ル程度迄利用スルノ余地アルヤニ存ゼラルルノミナラズ更ニ又当地ニ於テ三月五日ヨリ十二日ニ亘リ開催

定スルヲ要ス

次ニ実質ニ付之ヲ見ルニ本案ハ明ニ「ワシントン」ノ訓戒及「モンロー」主義ヲ滅却ス時勢ハ或ハ此伝来ノ政策ヲ拋棄スルヲ必要トセン然レドモ是米国民ニ取リ(脱)且重大ノ問題ニシテ吾人ハ此大責任ヲ取ルニ先チ再三再四熟慮攻究ヲ遂ゲザルベカラズ又聯盟案第一〇条ハ各国ノ独立及領土保全ヲ担保ス是重大且危険ナル約束ナリ之ヲ履行スル為ニハ畢竟軍備ヲ要ス米國ハ其意思ニ反シ他國ノ命令ニ依リテ戦争ニ入ルノ覚悟アリヤ最初ヨリ戦争ノ用意ヲ必要トスル如キ聯盟ハ果シテ平和確保ノ最善ノ方法ナリヤ更ニ該聯盟ハ一切ノ國際紛争ヲ裁決スルノ權限アリ從テ移民問題モ固ヨリ聯盟ニ附議セラルベシ移民及帰化ノ問題ノ如キヲ外國ノ決定ニ委ヌルハ正ニ國家主權ノ最モ貴重ナル作用ヲ拋棄スルモノナリ

聯盟条約ハ斯克ノ如キ重大ノ義務ヲ課シ且永久の性質ノモノナルニ拘ラズ聯盟脱退ニ付何等規定スル所ナシ
要之本案ニ対シテハ

第一、「モンロー」主義ニ関スル留保

第二、移民及帰化問題ノ除外

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三六八

セラルベキ國際聯盟會議(別電參照)ハ平和協會ノ事業ニシテ英仏米伊独等ヨリノ名士来会ノ管ナル上會議幹部ニハ當館員ニ於テ知合ノモノ有之旁適當且慎重ノ方法ヲ以テ斯ル機會ヲモ利用スルコト或ハ得策ナルベシト存ゼラルル処右様ノ運動ヲ試ムルコト適當ナリト認メラルルニ於テハ本問題ニ関シ心得置クベキ点就中帝國主張ノ内容及其根拠等御回示ヲ請フ
外務大臣へ含ミノ為メ転電シ置ケリ

三六七 三月二日 在米國石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

現在案ノ如キ國際聯盟ニハ米國ハ加盟スベカラザル旨共和党首領ロッチ氏上院ニ於テ演説ノ件

第一八三号 (三月四日接受)

次期議會ニ上院外交委員長タルベキ上院共和党首領「ロッチ」ハ二十八日議會ニ於テ二時間半ニ亘リ國際聯盟ヲ評論セリ要領左ノ如シ
聯盟案ノ字句生硬蕪雜一条トシテ解釈上誤解紛争ヲ招カザルモノ無シ此点第一ニ修正ヲ加ヘ一切曖昧ノ点ヲ明確ニ規

第三、平和的脱退規定

ヲ加ヘ其他各条ノ規定ヲ更ニ明確ニシ殊ニ執行委員會ノMeasures Recommendations Suggestions ガ拘束力有リヤ否ヤノ点ヲ確定スルヲ要ス然ラズンバ聯盟ハ平和ヲ確保スルヨリハ寧ろ戦争ヲ助成スルノ結果ヲ生ムベシ若シ本案以上ノ聯盟期スベカラズトセバ米國ハ百数十年國家ノ繁栄ト米大陸ノ平和トヲ確保セル「モンロー」主義ニ歸リ歐羅巴ハ希望トアラバ自ラ歐羅巴聯盟ヲ作り米國ハ必要ノ場合之ト協同シテ世界ノ平和ヲ計ルニ如カズ由來合衆國ニシテ國際聯盟ニ入ルトセバ是全然他愛主義ニ出ヅルモノニシテ米國自身ハ何等益スル所無シ故ニ米國ヲ害シ過當ノ犠牲ヲ要求シ又ハ他ノ野心ノ道具ト為ルノ虞アル聯盟ニハ加入スベカラズ是戦争ノ熱未ダ醒メズ人心浮動昂奮セルノ際急遽乱造セル該聯盟案ニ対シテ賛同スベカラザル所以ニシテ予ハ依然独逸トノ講和ヲ先ニ一切ノ緊急問題落着ヲ俟チテ後聯盟ヲ議スベシトノ持論ヲ棄テズ云々
在仏大使へ転電セリ

三六八 三月二日 在米國石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

米國上院ニ於テ外交委員長ハ大統領ガ移民問

題ハ内政問題ナリト断言セリト述ベタル件

第一八五号

(三月四日接受)

上院ニ於テ客月二十八日國際聯盟案ニ関シ討論中外交委員長「ヒッチコック」ハ大統領ガ兩院外交委員招待晚餐席上或委員ノ質問ニ答ヘテ移民問題ハ全然内政問題ニシテ米國ノ完全ナル管理ニ属スト決定的ニ断言シタリト告ゲ次デ日本ハ移民問題ヲ國際聯盟ノ管掌ニ帰セシムベク巴里會議ヲ導クノ望ミヲ全ク失ヒタリト附言セリ

三六九

在仏國松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種問題ニ関シ瑞西方面ニ於テ言論機關利用

方ニ付牧野男ヨリ在瑞西公使ニ回答ノ件

講第二四六号

在瑞西公使宛第二四号転電ス

牧野男ヨリ

貴電第六六号ニ関シ前段猶太人ハ兎モ角トシ敵國人ノ操縦ニ依ル「プロパガンダ」ハ我方所期ノ目的ヲ達スル上ニ効果少ナカルヘキノミナラズ万一其間ノ消息外間ニ洩ルルガ

如キコトアラバ却テ頗ル不利ナル結果ヲ招クノ虞ナキニ非ズト考ヘラルルニ付此際ハ見合セノコトト致度ク將又後段ノ御意見ハ至極同感ニ付折角御尽力相煩ハシ度ク尚本問題ニ付是迄当方ニ於テ取リタル措置並ニ今後ノ考案ハ天羽書記官ニ托送ノ書類(大臣宛講第一三三号第一四八号第一四九号及第一五五号)ニ就キ御承知アリタシ
大臣ヘ転電セリ

三七〇

内田外務大臣ヨリ
在米國石井大使宛(電報)

人種の差別撤廃提案ニ関シ好意的援助ヲ希望

スル旨米國大統領ニ申入方訓令ノ件

第一五五号(至急)

貴官ハ大統領渡仏前一応会見ヲ求メラレ大統領力此際世界永遠ノ平和ヲ確保セムカ為公平無私ノ精神ヲ以テ鋭意努力セラルルハ帝國政府ノ具サニ諒承シテ欣快ニ堪ヘサル所ナル旨ヲ述ヘラレ尚過般人種差別撤廃問題ノ商議ニ當リ大統領並米國委員カ日本委員ノ提案ニ切実ナル同情ト支持トヲ与ヘラレタルニ対シ帝國政府ノ深厚ナル謝意ヲ表セラレタル上帝國政府ハ國際聯盟ノ根本趣旨ニ稽ヘ人種ノ差別ニ依

リテ法律上ノ待遇ヲ異ニスベカラザルノ主義ヲ確立スルコトヲ極メテ緊切ナリト認メ此ノ主義カ一般ノ承認ヲ得ザルニ於テハ到底國際間並諸民族間ニ軋轢不滿ノ因ヲ絶ツコト能ハザルベク結局國際聯盟ノ円滑ナル運用ヲ期シ難キニ至ルベキヲ慮リ帝國政府ハ公平且正当ナリト信ズル右提案ヲ引続キ主張スルノ意思ヲ有スルニ付大統領ニ於テ此上共好意的援助ヲ与ヘラレムコトヲ希望スル旨ヲ申入レラレ尤モ提案ノ字句形式ニ至リテハ強テ既成案ニ拘泥スルノ必要ナキヲ以テ大統領ニ於テ別ニ考案モアラハ腹藏ナク開示セラレムコトヲ冀フ旨ヲ附言シ其ノ対談ノ模様御電報アリタシ
右在仏大使ヘ転電アリタシ

三七一

内田外務大臣ヨリ
在仏國松井大使宛(電報)

人種の差別撤廃ハ主義トシテ何人モ異議ナカ

ルベキニ付珍田大使ヨリ英國委員説得方訓令

ノ件

講第一一四号

珍田大使ヘ

人種の差別撤廃問題ニ関スル過般ノ交渉ハ英國委員ガ同國

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三七一 三七二

植民地側ノ態度ヲ顧慮シ我希望ヲ容レザリシ為不成功ニ了リタル処元來人種ノ相違ニ拠リ法律上ノ待遇ヲ異ニスルガ如キハ正義平等ノ觀念ヲ基礎トスル聯盟ノ本旨ニ反スルノミナラス又実ニ世界永遠ノ平和ヲ確保セムトスル聯盟ノ目的ニモ副ハサルコトト信ス殊ニ帝國政府ニ於テハ此際単ニ本件主義ノ承認ヲ得ムトスルニ止マリ直ニ之ト牴触スル各國現行法制ヲ改廢セシメ又ハ之ヲ無効ナラシメムコトヲ主張スルモノニ非ス惟フニ主義ノ問題トシテ何人ト雖異議ヲ唱フヘキ理由ナカルヘキニ付貴官ハ「バルフォア」氏又ハ他ノ適當ト認メラル、英國委員ト会見ノ上本問題ニ関シテ篤ト意見ノ交換ヲ遂ケラレ若シ帝國政府ノ想像スル如ク英國委員ノ右提案ニ対スル異議カ主義ノ問題ニ存セスシテ字句形式(フォーミュラ)ニ止マルモノトセハ如何ナル「フォーミュラ」ナラバ英國委員ニ於テ之ヲ認諾シ得ベキヤ先方ノ内意ヲ確メ結果電報アリタシ

三七二

在シドニー清水總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日本ハ移民問題ヲ國際聯盟ニ提出スルノ望絶

エタリトノ報道ニ関スル新聞論評報告ノ件

四五五

第三三號

(三月五日接受)

講和會議ニテ日本ハ人種の同等權ノ承認ヲ得ンガ為極力運動セルモ失敗ニ帰シ移民問題ヲ國際聯盟ノ議題トシテ提出スルノ望絶無トナリタルコト米國上院ニテ曝露セラレタリトノ新聞電報ニ関シ Sydney Evening News、White Australia ト題シ三月三日大要左ノ如ク論評セリ

米國ヨリノ通信ニ依レバ最モ delicate ニテ絶対ニ濠洲ノ死活ニ関スル移民問題ハ濠洲ノ意見ニ有利ナル方法ニテ講和會議ニ於テ決着シ各國民ハ domestic concerns ニ就テハ其主權ヲ維持ス可キコトニ決着セリト伝ヘラル濠洲又ハ米國ガ大戦捷ニ拘ラズ内地ノ自由及ビ自決權ヲ減損スルガ如キハ思料シ得ザル所ナリ 移民制限權ノ如キ deepest emotional feeling & strongest material interests ニ立脚セル重大事件ニ於テハ殊ニ然リトス右講和會議ノ決定ハ何レノ國民ニ対シ毫モ何等不敬ノ意ヲ含メルモノニ非ズ畢竟亜細亞人種ノ除外ハ彼等ノ倦ムコトナキ勤儉節制の習慣等ノ長所ヲ濠洲人ガ恐ルルニ起因セルヲ以テナル可ク濠洲人ハ自己ノ優勢ト利害ヲ等シクスル國民ノ援助ニ依リ如何ナル國民ニテモ此大陸ヲ領有シ同様ノ地位ニ立テルモノガ必

リ尚日本カ太平洋群島ノ委任統治者タリ得ルヤ否ヤハ疑問ニ属ス恐ラク濠洲ニ附与セラルヘシ支那ハ青島租借地ヲ國際協議ニ附スルコト及山東鐵道ノ還附ヲ要求シ居レリ多分其ノ目的ヲ達スヘシ日本ハ大奮闘ヲ為スニ非ズムバ凡テノ希望ハ画餅ニ帰スヘシ云々ト

三七四 三月六日 在仏國松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種的差別撤廃規定ニ反対スル英國側トノ折衝ノ手順ニ関シ珍田大使ヨリ報告ノ件

講第二九七号 (三月八日接受)

珍田大使ヨリ

貴電講第一一四号ニ関シ往電講第一五五号具報ノ如ク英國側反対ノ原動力ハ殖民地首相ニアリト推断セラルルニ付其後早速牧野男ト共ニ「ヒューズ」氏ニ会见ヲ求メタルモ同氏ハ過日來引続キ英國白耳義等へ出張ノ為未タ其機会ヲ得ルニ至ラス然ルニ此際本使ニ於テ直チニ「バルフォア」氏ト本件ニ付会谈ヲ試ムルモ却テ同氏は迄ノ態度ヲ一層鞏固ナラシムルニ過キサルヘキカト懸念セラルルニ付矢張先ツ以テ最近ノ機会ニ「ヒューズ」氏ト懇談ヲ遂ケ何トカ妥協

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三七四 三七五

ズ企ツベキコトヲナスニ過ギズ濠洲ノ此領土權ハ百余年間英國ノ制海權ニ立脚シ緩急有事ノ日ニハ五十万ノ精兵ヲ發シ得ベキコトト世界輿論ノ後援ナルニツノ新事実ニヨリテ更ニ強硬トナリタルモノナリ尤モ濠洲及ビ亜細亞ハ商業上互ニ倚ルベキ關係ヲ有スルヲ以テ經濟上相互ノ利益タルベキ密接ノ諒解ヲ立ツルコトニ努力スルヲ要ス況ンヤ亜細亞ハ古代ノ文化、美術、哲學等吾人ノ學ブベキ幾多ノ長所ヲ有スルニ於テオヤ云々

在英大使へ電報セリ

三七三 三月五日 内田外務大臣ヨリ
在仏國西園寺全權委員宛(電報)

講和會議ニ於ケル日本ノ立場ノ不利ナル情況ニ関スル國民新聞特派員ノ報道通報ノ件

講第一二三号

在貴地馬場特派員發國民新聞着電要領左ニ御參考迄
在巴里日本人ハ拳ツテ日本講和委員ノ微力ナルヲ憤慨シ居レリ國際聯盟條約中ニ人種の無差別ノ主義ヲ含マシメムトスル日本ノ提議ハ拒否セラレ日本委員ハ何等ノ力爭ヲモ為サズシテ服從シタルヨリ本問題ノ解決ハ殆ド望ナキニ至レ

三七五 三月十日 在中國小幡公使ヨリ
内田外務大臣宛

巴里講和會議ニ於ケル我人種差別撤廃ノ提案

ニ対スル中國官民ノ態度ニ関シ報告ノ件

附屬書 「人種差別撤廃問題ト支那國民」(調書)

機密第一一五号 (三月十九日接受)

大正八年三月十日

在支那 特命全權公使 小幡 西吉(印)

外務大臣子爵 内田 康哉殿

人種差別撤廃問題ニ関スル件

本件ニ関シ中畑通訳官ヨリ別紙提出致候処右ハ支那國官民カ本問題ニ対スル体度及ヒ対日本思想ノ如何ニ險惡ナルヤノ一班ヲ徴知スルニ足ルヘク候ニ付別紙送付供査閱候也
(附屬書)

人種差別撤廃問題ト支那國民

(中畑通訳官記、三月八日)

巴里ニ於ケル我カ全權委員ノ提議ニ係ル人種差別撤廃ノ提

議案ハ国際聯盟委員会ニ於テ種々紛雜ノ問題ヲ誘起スルノ虞アリトノ故ヲ以テ否決セラレタリトノコトハ二月十九日晚ノ新聞電報ニヨリ北京ニ伝ハリ翌二十日ノ我順天時報ハ「人種問題ト平和會議」ト題スル論說ヲ掲ケテ支那人ノ注意ヲ喚起シタリ然ルニ同日ノ各漢字新聞ハ右ノ電報サヘモ訳載セサルモノアル有様ニテ此人種問題ハ何等ノ感知ナキモノノ如ク爾來順天時報及ヒ支那人ノ多ク購読スル邦字新聞新支那及京津日々新聞ノ如キモ或ハ本邦新聞ノ本問題ニ関スル論說ヲ訳載シ或ハ其他種々ノ論評記述ヲ掲ケ輿論喚起ヲ試ミタルモ更ニ何等ノ感応ナク一般普通ノ輿論ニ聴ケハ曰ク今ヤ正ニ英米ノ声援ニ依リ巴里ニ於テ日本ト争フノ際支那ヨリ人種問題ヲ提議シテ英米ノ御機嫌ヲ損フカ如キハ以テノ外ノ事ナリトスルモノノ如シ対日感情ノ險惡此陋劣極マル俗論ニモ其一端ヲ徴知スベシ

二月二十三日日支語學練習會第二回ヲ私立中国大學講堂ニ開催ノ際

因ニ記ス日支語學練習會トハ十數年來北京ニ於テ専ラ我公使館ノ補助支持ニヨリ成立シ在留青年有志ニ支那語文研究ノ為設立サレタル支那語同學會(外務省留學生モ茲

リ曰ク日本ニテハ聯盟會議中本問題ヲ重要視シ民間ニテモ各種集合決議ヲ發表シ其他亞細亞青年會ノ組織アリテ後援運動ヲ試ム知ラス貴國方面此種ノ運動會合アルヤ否ト蔡氏答フ尚何等聞ク所ナシ曰ク此種ノ問題吾等青年有志須ラク正義ヲ提唱シテ正論ヲ維持セサルヘカラズト蔡氏答フ甚タ賛成スル所ナリ曰ク今日先ツ此練習會ヨリ提唱スル如何ト蔡氏暫シ熟考ノ上答フ卑見ニ依レハ先ツ兩國知名ノ士集合シテ進行ヲ策スルノ有効ナルニ如カス貴見如何ト曰ク甚タ然リ因テ再議ヲ約シテ此日分袂セリ

於是小官ハ船津書記官ノ意見ヲモ聞キ可成日本人カ主動者タラサルノ体ニ於テ輿論ヲ喚起シ人種問題ニ於テ日支兩國委員カ協同一致ノ步調ヲ取ルニ至ルカ又遙ニ当方面ヨリ我委員ヲ後援激勵スルニ至ルノ傾向ヲ現出セシムルコト甚タ興味アリ意義アルモノト認メ一面我カ特派員方面ヨリモ恰モ開會セラレタル国会ニ於テ何等カノ意見決議ヲ發表セシムル等此方面ハ専ラ特派通信員側ニ於テ接觸ヲ保ツ應酬ヲ試ムルコトトシ先ツ小官ヨリ蔡氏ニ対シ日本側ハ何時ニテモ呼応シテ起ツベキニ付貴國方面ノ步調ヲ整ヘタル上何等提示アランコトヲ求メタリ然ルニ二月二十七日蔡氏他用ヲ

ニ收容シテ併セテ監督ス)學生ト其他三井物産会社カ支那語學事情ヲ學習セシムル目的ヲ以テ特ニ設立シタル三井書院(開設一昨年現有學生三十名陸統養成ノ由)同一主旨ニ成ル三菱書院(昨年開設現在生徒四名ニ過キサルモ今春約二十名來學ノ由)ノ各生徒ト支那人側ニテハ國立北京大學ノ日本語科生徒及ヒ私立中国大學ノ日本語科生徒カ毎月一回集合ノ上兩國語ノ隨意談話ヲ試ミ或ハ兩國有識者ノ講演ヲ聴キ以テ語學ノ練達ニ資セントノ趣旨ニテ昨年十二月末成立シ其規約三条日本側、北京大學側中国大學側ヨリ各二名ノ理事者ヲ挙げ一切ノ斡旋ヲ試ムヘク其第一回ハ一月二十四日日本側ニテ主催シ大和俱樂部ニ開キ今次ハ其第二回中国大學側ノ主催ニ係ル第三回ハ北京大學側主催ニテ三月中開會ノ答

偶々北京大學校長蔡元培氏モ來場セラレ一場ノ講演ヲ終リタル後小官ハ蔡氏トハ多年ノ旧識ニテ且其ノ理想家ニシテ性格品行ノ高潔ナルヲ知ルヲ以テ本問題ニ対シ果シテ如何ナル感想ヲ抱クヤヲ試ミントテ兼テ用意ノ電報切抜ノ貼付ケヲ示シ筆談ヲ試ム(但シ當時他二人アリ講演中)先ツ問ウテ曰ク是實ニ亞細亞種族ノ大問題ナリト蔡氏答フ甚タ然

以テ公使訪問ノ後小官ニ面接ノ上曰フ実ハ支那側急速ノ步調程度ヲ定ムルコトハ容易ニ非ザルニ依リ先ツ極メテ少数ノ兩國人側ヨリ極メテ簡單ナル宣言の書面ヲ知名ノ士ニ配付シ發企贊同ヲ得タル後日ヲ期シ集合ノ上宣言電報ヲ發シ態度意思ヲ表示シテハ如何ト提議シ二三協議ノ上小官之ニ同感シ蔡氏ハ自ラ其書面ノ發頭人タル勿論他ノ一名ハ中国大學ノ校長姚撼氏コソ尤モ適當ナルベク後刻其同意ヲ得宣言の書面ノ原稿ト共ニ送付スベキヲ約シテ別ル此日夕刻蔡氏電話ヲ以テ姚氏カ喜ンテ署名ニ賛成シタルノ外前參議院長王家襄氏亦自ラ進ンテ此署名發企者タランコトヲ希望スル旨ヲ通シ來レリ因ツテ我方ニ於テハ特派員側ヨリ協議ノ上有賀博士及記者代表トシテ朝日新聞特派員中島為喜署名者タルニ決セリ翌二十八日ニ至リ蔡氏ヨリ原稿左ノ如シ

○先生台鑒逕啓者由大日耳曼主義与大斯拉夫主義之衝突而參以日耳曼民族凌駕其他民族之野心遂釀成此可怖之大戰爭而協商國之所以勝利則由於不問民族之差別若拉丁、若斯拉夫、盎格魯撒遜悉聯合以抗德不惟此也即人種之差別亦非所問、如亞洲之黃人美洲之黑人亦相与聯合而抗德然則差別之害与不差別之利、誠吾人所受於此次大戰

争之教訓而日本專使所提出之「人種差別撤廃」案誠当今和平會議中之重要問題矣不幸以他種原因臨時撤回暫不能列入聯盟草案而白人岐視黃人之習慣不能於此次會議中消滅之則是威廉第二^{ヴィルヘルム}雖失敗而其所持之黃禍論將仍為永久和平之障礙豈特黃種之不幸抑亦世界之危機也所幸者此察現雖予備委員會否決聯盟大会似有一線之希望吾中日兩國同人對於此大問題均難忍置擬於北京集兩國有志之士共同討論以策進行夙仰執事素特人道主義如得借重大名發起集會曷勝忻幸專此奉商並祝

公綏務請及早

示復

謹啓

惠示請寄東堂子胡同蔡宅為盼

而シテ右ヲ配付シ發企賛同ヲ求ムベキ知名ノ士ノ撰撰ハ一ニ之ヲ當方側ノ裁量ニ任セタリ因ツテ右書面ヲ印刷ニ付シ王家襄、蔡元培、姚墟、有賀長雄、中島為喜ノ名ヲ連ネ在朝野政客新聞側知名ノ士ニ郵送スルコト百數十通（共ニ三月三日午前ヨリ六日午後迄ニ夫々郵発セリ）

一面特派記者団ヨリ接触セル国会側ノ意向モ頗ル感応アリ兩院共開會ノ劈頭ニ於テ建議案ヲ提出スルニ決シ衆議院議

員孫潤宇ノ如キハ是非其建議案提出ノ演說ヲ為シタシトテ其材料蒐集方ヲ囑委シ參議院側ニテモ此種ノ希望ヲ抱ク議員少ナカラサル迄表面大多ノ感応ヲ認知スルニ至レリ

先是漢字新聞一般ノ論調記述ニ徴スレハ人種問題ノ如キハ風馬牛モ相関セサルモノノ如ク唯獨リ二月二十六日ノ惟一日報ハ其時評欄ニ人種問題ニ就イテハ日本ニ於テ熱烈ニ輿論沸騰シ居ラルルニ拘ラス支那人ノ何等感覺ナキハ奇怪ノ現象ナリトテ支那民族ノ前途ヲ悲觀シタル短篇ヲ掲ケタル外一モ記載スルモノナカリシカ勿論右書面發送ノ影響トシテ簡單ナカラモ記事電報等ヲ掲クルモノアルニ至リシカ三月五日ノ国是（倪嗣冲ノ機關紙トシテ衆議院議員光雲錦ノ經理スルモノ）光ハ昨年記者団ノ一員トシテ本邦ヲ視察セルモノナリ）ハ其緊要新聞欄ニ奇怪ニモ「米支国交ヲ離間スルノ詭計」ト題シ左ノ如キ記事ヲ掲ク

ウィルソン大統領力歐洲平和會議ニテ國際聯盟ヲ提倡シ弱國ヲ扶助スルコトヲ宣言シ我國力歐戰ニ因リ牽連シ受クル処脅迫ノ各種條約ニ對シ代ツテ不平ト為シ正義ヲ主張シ平和會議席上公平ノ裁判ヲ獲ルヲ冀フヲ宣布セリ日本ハ之ヲ禁阻スル由ナク抵制ノ策ヲ籌思シ米國ノ移民規

則カ黃白人種ニ對シ岐視スルニ因リ遂ニ人種差別撤廃案ヲ提出セントスルモ亦彼レ一國ニテ罪ヲ米國ニ開キ為ニ東亞問題ハ更ニ困難ノ境ニ入ランコトヲ恐レ臨時ニ撤回シタルモ乃チ我國朝野人士ニ運動シ公同集會討論シ我國ト協同シテ歐洲會議ニ提出セント欲スルモノナリ此案ハ米國労働党ノ必争スル所ニテ「ウィルソン」氏モ亦必ス米國會ノ同意ヲ得ル能ハサルヲ明知スルモ藉ツテ秘密條約ノ議案ヲ抵制シ亦米支ノ国交ヲ離間スヘシ望ムラクハ

我國人士切ニ盲從シテ其術中ニ陥ル勿レ云々

トテ次キニ當方ノ書面ヲ掲載シ居レリ其淺薄卑劣ノ謬見ニ至ツテハ殆ト濟度シカタキモ所謂支那國民思想一斑以テ窺知スルニ足ルモノアリ

三月三日以來右發企賛同ヲ求ムル書面發送後七日迄ニ蔡元培迄回答ヲ送來シタルモノ約四十名其發企人タルヲ快諾スルモノノ重ナルモノヲ挙クレハ衆議院議長王揖唐前參議院議長梁士詒、前山東省長教育總長蔡儒楷、財政總長龔心湛、其他張弧、丁士源、徐恩元、任鳳苞、張志潭等議員側ニ在リテハ王印川、陳煥章、馮家遂、孫潤宇等ニテ主義ニ於テハ全然同感賛成ナルモ職守ノ閑スル処發企人タル能ハ

スト云フモノ曰ク外交次長陳錄曰ク大理院長姚震庭長余榮昌ナリ獨リ進歩系ノ智囊策士、國際聯盟同志會理事、國民外交協會ニ關係シ且外交委員會員タル林長民ハ左ノ意味ノ回答ヲ寄セタリ

人種差別ノ撤廃ハ元ヨリ賛成スル所ナルモ支那ハ國際上不對等ノ待遇ヲ受クルモノ猶多ク歐洲會議ニ提議スル問題ハ多々ナリ本件ノ如キハ聯盟條約成立後討議スベキモノト考フ一切國際聯盟同志會ニ於テ研究中ナレハ其結果ハ更ニ報答スヘキモ自分ハ發企人タラサルヘシ

云々又七日國民外交協會ノ名ニヨル回答左ノ如シ

本件ハ主義ニ於テ甚タ賛成スル所ナルモ時期ニ於テ猶研究ヲ要スルモノアレハ一時賛同シ難シ云々

之レ明カニ今回ノ提議ニ不賛成ノ意ヲ表明スルモノナリトス

先是我カ西園寺侯爵力二日巴里到着ノコト及ヒ「ウィルソン」大統領力三月十四日巴里ニ着スベク人種差別撤廃問題ハ同時ニ提議セラルベシトノコトハ中外ノ新聞電報ニ依リ伝稱セラレタルニヨリ少クトモ其以前ニ於テ當方面ノ意思ヲ表示スルコト可然考ヘタルヲ以テ七日朝蔡氏ヲ其自邸ニ

訪ヒ右ノ事情ヲ告ケ一先ツ發企人ノ會合ヲ催フシ意思ヲ表示シテハ如何ト其意見ヲ問ヒタルニ蔡氏大ニ之ヲ然リトシ遅クトモ十二日ニハ集會ヲ催スベク其場所ノ如キモ勿論世上ノ誤解ヲ避クル為適當ノ場所ヲ撰択シ又國是報ノ如キ愚説ニ對シテハ自分ニ於テ簡單ナル声明ヲ新聞紙上ニ發表スヘク一切自分ニ於テ取計フヘシト約シタルニヨリ大ニ其高意ヲ諒トシ其尽力ヲ依頼シテ帰館セリ

然ルニ翌八日朝蔡氏突如來訪昨朝十二日迄ニ一集合ヲ催フスベク一切ノ手續迄打合セタルモ実ハ意思發表ノ時期ト方法ニ付キテハ王家裏姚撼等其他ノ賛同發起者間ニモ種々ノ異見出テ十二日迄ニ強ヒテ集合スルモ意見紛岐シテ何等決定スルナキニ終ラハ却ツテ不体裁ノ次第ニ付十二日迄ニ集合ノコトハ一応延期ノコトト致シタク自分ニ於テハ意思疏通一致ニ尽力シ可成時機ヲ逸セサル様勉ムベキ旨懇談申出タルニ付小官ハ早クモ或ハ其他故出来シタル情況ヲ察知シ且蔡氏ノ高潔ナル人格ヲ信用シ又公正ナル同氏ノ立場ヲ困難ノ地位ニ陥ラシムルニ忍ヒス且本件ハ表面上飽迄蔡氏支那側ノ主動ニシテ日本側ハ共同賛同ノ地位ニアルニ顧ミ大ニ其來談ヲ諒トシ一切貴方ノ裁量尽力ニヨリ進行スヘキモ

論ニ蔡氏ノ努力ト国会方面ノ体度如何ニ徴セン乎

尤モ笑フヘキハ梁啓超ノ高弟ニシテ其機關晨報主筆トシテ毎日排日本ノ記事論說ヲ鼓吹スル梁秋水ハ早速至極賛同回答ヲ發シナカラ七日ニ至リ更ニ賛同取消ヲ報知シ來リタル趣ニテ斯間ノ變調ノ由來又察知スベキナリ

追記

三月十三日蔡元培ハ支那側發企者ノ意見ヲ纏ムル為北京大學ニ予備會合ヲ開催シタル処此日會合者王家裏蔡元培姚撼ヲ初メトシ其他梁士詒、王揖唐、王印川、毓朗、陳煥章、丁士源其他知名ノ士十数名種々意見ヲ發表シ其間直チニ日本側ノ主張ニ賛同シ協力同一ノ行動ヲ開始スベシト主張スルモノモアリシカ多クハ直チニ移民問題ト関連論及スルモノアリ結局何等ノ一致ヲ見ルニ至ラス要スルニ右ハ林長民一派國民外交協會側主張ノ影響スル所トモ認メラレ王蔡姚三氏連名ニテ我方ニ對シ書面ヲ以テ左ノ如ク挨拶シ來レリ曰ク

同人ハ人種差別撤廃問題ノ為ニ特ニ今日我國ノ賛成諸君ヲ集合シテ商議シタルニ本問題賛成賛見ヲ發表スル極メテ詳尽ナリ且我國方面ニテ別ニ一研究會ヲ組織シテ宜シ

要ハ聯盟條約決定ノ時機ヲ逸セサル様與々注意シテ別ル其日蔡氏ノ悄然タル体度且種々交談シタル結果ニヨリ蔡氏突如來訪セサルヲ得サルニ至リタル内情ヲ推測スルニ

一、西園寺侯カ巴里ニ着シ本案再提議ノ必要上或ハ支那委員ニ何等カノ接洽ヲ試ミタル結果支那委員支那政府ノ本件ニ對シ体度ヲ決定スルニ至リタル結果

二、進歩系一派乃チ歐洲ニハ梁啓超、北京ニハ林長民ヲ其策士トシ外交委員會ヲ本拠トシ國民外交協會等ヲ其機關トシ偏ニ英米兩強大國ノ後ヘニ附隨シテ其援助ニ藉リ日本ヲ圧迫シ報復セントスル一派ノ妨害ニ出テタル結果此派ノ觀察ニ依レハ人種差別撤廃ヲ聯盟條約ニ原則トシテ記載スルコトサヘ頗ル困難ナリ若シ日本一國ノ努力ニ依リ成功セハ支那ハ坐ナカラニシテ其效果ニ浴スヘク英米ニ倚ツテ日本ニ當リ日本ヲ圧迫シ報復セント切角成功シツツアル際何ヲ苦ンテカ日本ト協同シテ英米ノ不快ヲ冒スヘケンヤ

卑屈至極寧ロ可憐可惡ノ心情ト雖モ是正ニ今日支那國民一般ノ思想ナルヲ奈何セン蓋シ此推測ノ誤ラサルモノアラン是レ本問題今日迄ノ經過ニシテ向後ノ發展ハ大局趨勢ハ勿

ク進行ヲ図ル筈ナリ蓋シ本問題ハ重要ニシテ特別審慎ヲ要スル次第ナレハナリ云々

ト有之モ支那人一般ノ頗ル冷淡ナル体度ニ徴セハ或ハ其慣用手段名ヲ審慎ニ仮リテ遷延ノ計ヲ為スモノナルヤトモ察セラル

三七六 三月十一日 内田外務大臣ヨリ 在中國小幡公使宛 (電報)

人種の差別撤廃問題ニ関シ在米大使ニハ米国大統領ノ援助ヲ求ムルコト及在英大使ニハ英國全權ト交渉スルコトヲ訓令セル旨通報ノ件

第三三三三三

往電第二三五号ニ関シ在米大使ニ於テ米國大統領再渡仏前會見ヲ求メ本件ニ関スル同大統領從來ノ好意的態度ニ對シ帝國政府ノ謝意ヲ表シタル上國際聯盟ノ根本主義ニ稽ヘ人種の差別撤廃ノ主義カ確立セラレサルニ於テハ諸民族間ノ軋轢ヲ絶ツ能ワス結局國際聯盟ノ運用ヲ期シ難キニ至ルヘキヲ慮ルニ依リ帝國政府ハ本提案ヲ引続キ主張スヘキニ付此上共大統領ノ好意的援助ヲ与ヘンコトヲ求メ且我方ニ於

テハ本件提議已成案ノ字句形式ヲ固執スル次第ニ非サルヲ以テ此点ニ関シ大統領ノ腹藏ナキ意見開示ヲ求ムヘキ旨三月三日在米大使ニ電訓シ又珍田大使ニ対シ過般ノ本件交渉ハ英国委員カ同国植民地側ノ態度ヲ顧慮シテ我希望ヲ容レサリシ為不成功ニ終リタル処本件人種の差別撤廢ノ主張ハ前記在米大使宛往電ノ通リノ理由アルノミナラス殊ニ帝国政府ニ於テハ此際本件主義上ノ承認ヲ得ントスルニ止マリ直ニ之ト抵触スル各国現行法制ヲ改廢セシムルコトヲ主張スルモノニアラス惟フニ主義ノ問題トシテハ何人ト雖モ異議ヲ唱フヘキ理由ナカルヘキニ付珍田大使ニ於テ英国委員ト意見交換ヲ遂ケ若シ英国委員ノ異議カ我方想像ノ如ク単ニ字句形式ノ点ニ止マルトセハ此点ニ関スル英国委員側ノ内意ヲ確ムヘキ旨三月四日電訓シタリ

三七七 三月十一日 在中國小幡公使ヨリ
内田外務大臣宛

人種の差別待遇撤廢問題等ニ関スル英国人ノ
日本攻撃投書新聞切抜送付ノ件

附屬書 三月十一日附北京デリー、ニュース紙掲載ノ
右記事切抜

Correspondence.

*The Editor is not responsible for
opinions expressed by correspondents.*

Japan and the Self-Determination of Races.

.....

To the Editor, The Peking Daily News.

Sir:—

When, five and a half years ago, I was travelling in the interior of Formosa, I saw in the dense jungle a stretch of wire fencing which appeared out of the undergrowth in one direction and disappeared into it again in another. In reply to my enquiry, the Japanese escort of our party informed me that this was an electrified wire which encompassed the whole of the vast interior of the island inhabited by the Formosan aborigines, and that not only was any person who touched the wire immediately killed by the shock, but that the wire

公第九九号 (三月十八日接受)

大正八年三月十一日

在支那 特命全權公使 小幡 西吉(印)
外務大臣子爵 内田 康哉殿

当地在住英国人「ワーナー」(Edward Chalmers Werner 元英国領事ニテ退職後専ラ著作ニ従事シ支那ニ関スル社会学上ノ大著作アリ)ハ今十一日ノ北京「デリー」、ニュース」紙上ニ二欄余ニ亘ル長文ノ投書ヲ為シ先ヅ日本カ台湾蛮人ニ対シ剿絶方針ヲ執リ来リタルヲ難シ尋テ朝鮮併合ノ真意ニ及ビ日本ノ行動ヲ独逸ノ虚欺偽善ト類比シ日本カ五大國ノ一トシテ千古未聞ノ重要會議ニ参加シツツアルヲ非トナシ日本ヲ以テ人種差別的待遇撤廢ヲ提議スルノ資格ヲ有セストナシ日本ニシテ五大國會議ニ加ハル以上ハ平和的非軍國的農業的文雅の哲學的ナル支那ハ一層之ニ代ツテモ該會議ニ参加スルノ資格アリト論シ居リ候別紙右投書切抜玆ニ及御送付候間御査閲相成度此段申進候也

(附屬書)
三月十一日附北京デリー、ニュース紙掲載ノ英国人「ワーナー」ノ投書切抜

cordon was gradually being drawn tighter, so that it was merely a matter of time before all the aborigines would be penned up, like sheep in a fold, in a trap from which any attempt to escape would mean instantaneous death. The object of this device, he added, was the extermination of the aborigines. This was said with a broad grin, which disgusted me, since it indicated callousness and even savage pleasure in a matter of life and death, which would not have been exhibited by the speaker had it been his fate to be inside the wire death-trap instead of outside it. To my mind, the wire did not indicate correctly the frontier between savagery and civilization.

In the intervening years I have often wondered how much further that wire circuit has been contracted, and pondered over the fate of the race of human beings inside it faced with extermination merely because another race has it in its power to exterminate it.

Recently the Japanese have used aeroplanes to fly

over the enclosed districts inhabited by these aborigines, and have stated, in print, with the usual savage glee, “there is nothing the aborigines fear so much as these aeroplanes.” Though long experience has taught me to receive Japanese statements always with caution and frequently with scepticism, I unreservedly believe every word of that statement. There is here at least one spoken truth. The aborigines have probably a very good reason for fearing the Japanese aeroplanes.

The Formosan aborigines may or may not have heard that there has recently been a great war in Europe waged with the object of upholding right, even if small and weak, against might, even if great and strong. I cannot say whether they have heard of this war or not; but I can assert with confidence that they have never heard, because they have never been allowed to hear, of the principle of the self-determination of races which it is one of the great and noble objects of the victors in that war to establish throughout the world. And I

fast. That at once shows the mark of the Beast.

The Koreans recently, with much difficulty and at much expense, managed to send some delegates on their way to tell the arbiters of their fate, what they wished their fate to be—as they had a perfect right to do—but they were arrested and punished by their Japanese overlords, whose only object is their progress and general welfare. It now seems doubtful whether they will succeed in getting a hearing at all. And if so, their progress and general welfare will continue until they are all exterminated, and none is left to assert their rights or state their case before an impartial tribunal. They are denied the right accorded by civilized nations to the lowest criminal. And if the Koreans are thus to be gagged whilst they are being murdered, it is not reasonably to be supposed that the Formosans will be given any facilities for making their wishes known to those who have it in their power to rescue them from their impending fate.

would ask the question: if these people were given the choice of determining their future, as they have a right to determine it under that principle, would they decide that they wished to be exterminated?

Who is to speak for this people? Who is to save them from the extermination awaiting them? I am aware that the Japanese will deny that their object is extermination, and allege that their only aim is the benefit and civilization of the Formosan aborigines. To which I will reply that these statements—denials of the statements made to me by Japanese in Formosa—being self-contradictory, are unacceptable, and put the makers of them out of court; and, further, that the Japanese are not the right people to be entrusted with the civilization of any of the primitive races. And they are not the right people to be entrusted with the difficult task of civilizing a primitive race because their own civilization is an imitated civilization, the civilization they imitated being that of Germany, and more especially of Prussia and the mailed

In view of the above facts, and in view of the attitude of Japan towards the races she has conquered by brute force and is set on exterminating with savage callousness, it is perhaps not surprising to read that the Japanese consider that “Japan is peculiarly fitted to take up this question for ensuring equality and fairness of treatment of all races.” There you have German lying and hypocrisy added to the results of a long course of German militarism and kultur. Here is another result of that training:—On arrival in France, “Marquis Saionji gave out that Japan favours an enduring peace for the Far East as well as the West, advocates the League of nations, and *justice and impartiality*.” We find the same thing in the statement that “Japan is full of altruism towards China,” made by Baron Makino, who recently published the further untruth that the Japanese struggle with China in 1894-5 was “a war of defence, not of offence:” an imitation of the German lie regarding the war they deliberately prepared for forty years and then

provoked against France. Surely President Wilson's phrase "the debasing influence of illicit ambitions" could have no better illustrations. "Japanese diplomatic denials," says one writer, "are coming to be estimated at their true worth." It is high time that they were.

If the Big Five are sitting at the Peace Conference table merely to play a game of bluff, then we may well despair of the World's Peace; if one member of the five is bluffing or trying to bluff the other members, that member should be summarily ejected. The reason for including little Japan in the group of the Big Five was presumably that she took part in the war against the Central Powers. There is evidence to show that the reason why China was slow in entering the war and did little after entering it, was that she was threatened by Germany and Japan—the one the enemy, the other the friend of the Allied Powers, respectively. Be this as it may, after more than thirty years' special study of the science of the development of nations, I state deliberately

that the inclusion of Japan in the group of the Big Five at this historic Peace Conference, which is to form the League of Nations, was an egregious sociological blunder; and I state further and deliberately my conviction that China, a peaceful, non-military, agricultural, literary, and philosophical nation, with no wish to exterminate the aboriginal races under its care, possesses the elements of true as opposed to superficial civilization in a far more marked degree than Japan, and should have been included in the group of the Big Five instead of her.

Those of us who have watched with sadness and pity the gradual disappearance of the old genuine statesmanship, as represented by the type known as the "English gentleman and sportsman," who played a fair, unselfish, straightforward game, and did not grab all he could get merely because he had the power or opportunity to do so—a type which called forth our admiration and respect—and its supersession by the modern imitation diplomacy, characterized by lying and trickery, injustice and under-

hand dealing, including, amongst other despicable methods the system of secret reports (mostly secret libels written by cowards)—a pseudo-diplomacy worthy, even unworthy, of the thief or the cardsharp,—pseudo-diplomacy which calls forth our contempt and disgust—

hoped that those who, Christlike, have given their lives for others in this war would not have shed their blood in vain, and that men would look each other straight in the face with the look of the English gentleman and sportsman, and not with the furtive look of the thief and the thought, in their minds: "what has he got and how can I get it from him?" Confucius, half a millennium before Christ, put the idea concisely—an idea approved by Christ but little acted upon by Christians:—"The gentleman understands *right*; the cad understands *interests*—what will pay." Say what you will, a lie is a lie and an underhand trick is an underhand trick in international, national, and official transactions as much as in private transactions. But if bluff and trickery are

to obtain even at a Conference especially convened to put an end once for all to the old cardsharp and pick-pocket diplomacy and the results it produces in periodical wars and massacres, what hope is there for the establishment of a stable, world-wide peace among the nations?

Any nation which is carrying an extermination policy—any murderer-nation in fact—has no right to sit at a Council whose object is "to clear away the miasma of distrust and intrigue, and enable people that were suspicious of one another to live as friends and comrades." Germany, Turkey, and Japan are all exterminationist nations. From the sociological point of view all three are nearly akin. The latter has no more right than the other two to receive a mandate to govern a primitive people. Japan has demanded the abolition of race-discrimination, while it is all the time practising race-discrimination in its most diabolical form against the subject races it professes to love and cherish. Paradoxical though it may sound, I am convinced that the abolition of race-discrimination is

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三七八

permissible with regard to China, but not with regard to Japan. By their works ye shall know them.

Yours faithfully,

EDWARD CHALMERS WERNER.

Peking, March 9, 1919.

三七八 三月十三日 在シドニー清水総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

聯盟ニ対スル日本ノ態度、人種差別撤廃、移民及青島ノ諸問題ニ関スル新聞社説報告ノ件

第一号

巴里ヨリノ新聞電報中一、日本ハ国際聯盟ノ理想ニ関シ不快ノ念ヲ懷抱セリニ、日本ハ平和會議ニ人種問題ヲ提出スベク決定シ多分聯盟憲法ノ発端ニ米国独立宣言ノ如ク各国人ノ同等ナル事ヲ掲グベシト主張スルナラントノ二項及東亜旅行先ヨリ此程帰リタル伝道協會役員 Bazeley ノ視察談ニ付 Sydney Morning Herald ハ三月十三日ノ社説ニ大要左ノ通論評セリ

日本政府ノ代表者ハ世界ノ民本の平和ヲ創設スル為同盟國ト協調スベキ旨屢々声明シタルガ若シ在巴里ノ使節ガ日本ノ主張貫徹ノ見込立ツ迄ハ日本ヲ聯盟ノ一員トナスコトヲ

四七〇

差控フベシトノ訓令ヲ受ケタリトセバ甚ダ日本ノ不利益ニテ多分無根ナルベク国際間ノ正義ヲ履行シ暴力ニ依ル野心ノ遂行ヲ予防スベキ共通目的ヲ有スル聯盟ニ参加ヲ拒ム事ハ進歩的國民ノ堪ヘザル所ナラン又人種問題ニ付テハ日本ハ情報ノ如キ要求ヲナサザルベシト信ズベキ理由アリ日本人ノ拓殖シタル邦土ニ東洋移民入國ノ問題ハ各人ハ同等ナリトノ題目上ニ議定シ難キハ日本使節ノ飽ク迄承知セル所ニシテ日本ニテモ朝鮮人台湾人支那人等ヲ同等視セザルニテモ明ナリ若シ強ヒテ英國領土ヘノ移民問題ヲ主張スレバ英國政府ト海外英領地間ニ重大ナル難問題ヲ生ズベキハ日本ノ十分理解スル所ナリ故ニ日本人ノ希望ハ主義上各國民ノ同等ヲ認メシメントスルニ過ギズシテ移民入國問題ハ時勢ノ進運ニ伴ヒ自動的ニ解決スルヲ待ツノ wiser course ヲトルベシト吾人ハ信ゼントス日本政治家ハ白人社会ニ東洋移民ノ入國ニ対シ制限ヲ加フルヲ余儀ナカラシムル明白ナル事実ヲ目下自由討議ニ附スルハ如何ニ不得策ナルカヲ明察スルヲ要ス云々

又日支關係ニ対シ左ノ批評アリ

日本ハ日英ノ兵力ニテ奪ヒタル青島ニ於テ手広キ居留地ヲ

設ケ Docks 海軍兵廠停車場発電所用水設備等ノ Concession ヲ得タリ若シ此ノ協定ガ確認セラルルニ於テハ支那ニ対シテノミナラズ東洋貿易ニ關係アル他ノ國民ニ対シ

Most unjust ナルベシ云々

三七九 三月十四日 在米國石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種差別問題ニ関シ紐育ニ於テ為サントスル

演説ノ主旨報告ノ件

第七五号

本使今十四日紐育ニ到リ宴会席上人種差別撤廃論ヲナス積リナリ近頃該問題ハ国際聯盟ニツレテ論及セラレ何レモ移民問題ト混同シテ一併反対セラルガ故ニ此点ニ付世論ノ誤ヲ正スヲ目的トシ入國居住ノ自由ヲ保障セル現行日米条約文ニ拘ラズ自発的ニ移民制限ヲ誠実ニ実行スル帝國政府ガ聯盟ニ人種差別撤廃ノ一箇条ヲ設ケタレバトテ之ヲ楯ニ直ニ移民問題ノ解決ヲ迫ルヘシト恐ルルモノハ日本ヲ解セザルモノナリト言明スヘシ本使十八日帰任ノ予定ナリ
右在仏大使ヘ転電セリ

三八〇 三月十五日 内田外務大臣ヨリ
在仏國松井大使宛(電報)

人種の差別撤廃期成同盟会ノ活動状況等通報ノ件

講第一五七号

(一)人種の差別撤廃期成同盟会ノ実行委員ハ三月十四日衆議院ニ会合協議シタルガ該会目的ノ貫徹不可能ナルニ於テハ更ニ政府彈劾ノ新団体ヲ組織シ國論ヲ喚起シ内閣打破ノ運動ニ着手スヘク尚我カ國ハ国際聯盟ヨリ脱退スヘシトノ議論出デ結局来ル二十三日更ニ大会ヲ催シ決議ヲ為スコトニ決セリト

(二)朝鮮各地ノ騷擾ハ漸次鎮靜ノ模様ナルモ京城龍山ニ於ケル電車及各工場ノ従業員ハ未タ復職セズ依然休業状態ニ在リ

(三)新任仏國大使「バプスト」氏十四日南京丸ニテ着浜直ニ入京セリ

三八一 三月十五日 在仏國松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種の差別撤廃問題ニ関シ聯盟委員會ニ於ケル日本ノ提案及其理由等ヲ珍田大使ヨリ濠首

相ニ説明ノ件

講第三六五号(極秘)

(三月十七日着)

往電講第二九七号ニ関シ

其後「ヒューズ」氏一旦帰巴シタルモ引続キ「リヨン」旅行ノ為遷延シ三月十四日始メテ会見ノ機会ヲ得タルニ付牧野珍田両委員同氏ヲ訪問シ人種の差別待遇ノ撤廃問題ニ関シ国際聯盟委員会ニ於ケル日本ノ提案及其ノ成行竝ニ提案ノ理由等ニ付大体往電講第一四八号ノ意味合ヒヲ以テ説述シ殊ニ日本ノ主張ハ決シテ直チニ現存ノ法制ヲ改廢セシメントスル意ニ非ズ唯均等待遇ノ大主義ヲ宣明セントスルニアリ移民問題ノ如キ實際ノ案件ニ関シテハ將來彼我当局ノ間ニ達シ得可キ解決ニ讓ルベシトノ点ニ特ニ重キヲ置キテ語リタルニ「ヒューズ」氏ハ人種の差別待遇ノ撤廃ハ主義トシテハ何人モ異論無キ問題ニシテ自分モ主義上異議ヲ挾ム訳ニハ非ス唯實際問題トシテハ極メテ重大且困難ナル問題タルヲ免レス事ノ是非ハ別トシテ濠洲ニハ濠洲ノ輿論及ヒ立場アルヲ以テ自分ニ於テハ十分ノノ顧念セサルヲ得サル境遇ニ処ルノ事情ハ諒察ヲ請ハサルヲ得ス随ッテ自分ニ於テハ右主義ニ對シ異論無シトスルモ之ヲ支持スルニハ日

本側提示ノ字句ニテ支障無キヤ否ヤ十分ニ考究ノ上ニ非レハ確答シ難シト曰ヘルニ付我カ委員ハ前述ノ通我カ主張ハ專ラ主義ノ闡明ニ在リ而シテ此ノ主義タルヤ國際聯盟ノ大方針ニ適合シ何人ト雖反對ナカルヘク又日本ノ輿論モ此ノ点ニハ強硬ノ態度ヲ執リ居ルヲ以テ篤ト熟考ヲ遂ケラレ度ク日本委員ニ於テハ國際聯盟問題ニ關聯シ最近ノ機会ニ於テ更ニ上叙趣旨ノ提議ヲ為スベキ積リナルニ付賛成ヲ希望ス尤モ提案ノ「フォルミュラ」ニ就イテ出来得ル限り貴見ヲ参酌スベキニ付此点ニ關シ腹藏ナク意見ヲ交換スルヲ為充分ニ右提案ノ研究ヲ請ヒ度キ旨ヲ陳ベ再会ヲ約シテ分レタリ要スルニ「ヒューズ」氏ハ終始「ノンコミッタ」ノ態度ヲ執リタルニ付キ果シテ如何ナル修正案ヲ出スヘキヤ予測シ難キモ是迄ノ經過不取敢電報ス

英、米、伊へ転電セリ

三八二 三月十六日

内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛(電報)

國際聯盟案ニ關連シ人種の差別待遇撤廃問題

ニ付我目的達成ノ為尽力方希望ノ件

講第一六三号

青島並ニ赤道以北独領南洋諸島問題ノ二件ハ今後意外ノ故障突発セザル限り先ヅ大体我希望通り解決セラルベキモノト看做シ差支ナキ形勢ニ見受ケラルル処右二件以外ニ於テ我方ニ取り最重大ナル問題ハ人種の差別待遇撤廃問題並ニ國際労働法制ノ二件ナルモ該二件トモ國際聯盟ト密接ノ關係ヲ有シ之ト終始スベキモノニ有之而シテ國際聯盟ニ關シテハ「ウィルソン」氏過般帰米中反對派ノ氣勢緩和ニ努メタルニ不拘共和党上院議員ノ意嚮頗ル強硬ニシテ大統領モ遂ニ臨時議會ヲ開催スルナク其儘再ビ渡仏ノ途ニ上リタルモノト推察セラルル次第ナルガ今後民主党ヲ初メ労働社会階級相協力シテ資本家側ニ對抗シ全国ニ於ケル民間ノ輿論ヲ喚起シ之ニ依リテ聯盟案ノ通過ニ後援ヲ与フル等ノ形勢ヲ現出スルニアラザル以上米國ニ於ケル該案ノ運命ハ寧ロ悲觀スベキモノアリ然リ乍ラ「ウィルソン」氏ニ取り該案ノ成否ガ極メテ重大ナル關係ヲ有スル事申ス迄モナク随ッテ同氏トシテハ飽ク迄勇往邁進シテ既成案ノ儘又ハ場合ニヨリ多少ノ修正ヲ加ヘ兎ニ角巴里會議ヲ通過セシメタル上之ヲ本國ニ持チ帰リ輿論ヲ後援トシテ極力該案ノ上院通過ヲ計ルベキヤニ觀察セラルル処米國議會ニ於ケル「ウィル

ソン」氏ノ立場ハ昨今米國ニ於ケル移民問題ニ對スル輿論ノ傾向ニ顧ミ人種の差別待遇撤廃ニ關スル我希望貫徹ニ不利ナルガ如クナルモ万一同氏ニシテ聯盟案ノ修正ヲ試ムルニ於テハ自然我主張ノ貫徹ヲ計ルニ都合好キ形勢ヲ現出セズトモ計リ難キニ付右ノ如キ場合ニ於テハ勿論又同氏ガ既成案維持ノ場合ニ於テモ幸ヒ本問題ニ付先般米國側ニ於テ既ニ同意ヲ与ヘタル行懸ニ訴ヘ今一応其助力ヲ求メ又英國殖民地側ノ反對ニ對シテモ英國當局ト直接交渉ヲ遂ゲラルルハ勿論米國側ノ助力ヲモ求メラレ精々我目的ノ達成ニ尽力セラレン事切望ニ耐ヘズ右ハ申ス迄モナク疾ク御配慮中ノ事ト存ゼラルルモ万一本問題ニシテ全然我方ニ不利ナル結果ヲ見ルカ如キ事アラシカ或ハ國論ノ沸騰ヲ免カレザルベキ虞アルガ上ニ頃日米本問題ニ對スル帝國全權委員ノ態度トシテ各様ノ巴里電報本邦新聞紙ニ掲載セラレ居ルニ付念ノ為メ御注意旁々往電第一〇〇号第八項ニ對シ至急一応ノ御回電アラム事ヲ希望スル次第ナリ

三八三 三月十六日

在米國石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

石井大使ノ人種問題演説ニ對スル重ナル論評

報告ノ件

第二二四号

十四日紐有「ジャパン、ソサイチー」ニ於ケル人種問題ニ関スル本使ノ演説ハ十五日各新聞ニ掲載セラレ時節柄世上ノ注意ヲ喚起セリ重ナル論評大要左ノ如シ

(一)華盛頓ポスト 石井大使ハ人種差別問題ニ関スル修正ヲ見ルニ非サレハ日本ハ聯盟ニ加ハルコトヲ欲セザル意向ヲ洩セリ本問題其他ノ事情ヨリ判断スルニ日本ハ聯盟原案ヲ支持セザルモノト認ムルヲ得ベシ濠洲及加奈太ニシテ飽ク迄人種平等主義ニ反対スル限り英国ハ日本ニ対スル同盟ノ情誼ニ顧ミ既ニ無留保ニテ承諾セル聯盟原案ヲ握リ潰スノ外無カルベシ仏国モ伊国モ共ニ種々注文アル模様ナレバ此際米國トシテハ暫ク聯盟問題ニ深入リスルコトヲ見合セ追ッテ修正案成立ノ上去就ヲ決スルコト然ルベシ例ヘバ米國ノ門戸日本移民ノ為開放セラルベキガ如キ規定設ケラレタル場合ニハ米國ハ聯盟ノ一員タルコトヲ辞スルヲ得ベシ

(二)華盛頓イーブニング、スター 石井大使ノ演説ハ聯盟案討議上常ニ注意セラルコトナルベシ該演説ヲ見ルニ日本ガ人種問題ニ関スル修正不成立ノ場合聯盟ニ加入セザル

(四)上院民主黨議員チエンバーレーン 石井大使ノ主張スルガ如キ規定ヲ聯盟案ニ設クル時ハ米國西部地方ノ破滅ヲ来スベキヲ以テ到底之ヲ承諾シ難シ日本ニシテ飽ク迄之ヲ主張シ他ノ聯合國之ヲ拒絕シ其結果日本ニシテ聯盟ニ加ハラザル時ハ独露日ノ三違反國ヲ現出シ其結合ニ依リ再ビ世界の戦争ヲ實現セシムルヲ得ベシ(最近新聞紙中斯ル論議ヲナスモノアリ) 危険ハ目前ニ迫リツツアルニ付腹藏ナキ討議ヲ要ス吾人ハ聯盟ニ依リ米國ノ根本の權利ノ如何ナルモノヲモ失フコトヲ欲セザルニ付之ヲ失ハンヨリモ寧ろ第二ノ大戦争ヲ見ンコトヲ欲ス

(四)上院民主黨議員キング 人種問題ハ日本ノ名譽ト密接ナル關係アルニ顧ミ吾人ハ日本ノ主張ニ対シ非難ヲ加フルコトヲ得ズサリ乍ラ労働問題ノ為東洋労働者ノ横溢ヲ防グノ措置ヲ確保セザルベカラズ目下ノ急務ハ兎モ角平和条約ヲ結ビ國際団体問題ハ之ヲ後廻シトスルコト得策ナルベシ聯盟原案ハ修正スベキ箇条多ク之ヲ修正セザル時ハ反対スル外ナシ

(四)上院共和黨議員ジョーンス 聯盟案支持者ハ移民問題ヲ國內問題ナリト称スルモ其誤レルコト石井大使ノ演説ニ依

決心ナリトハ判断セラレザルモ巴里會議ニ於テ更ニ該問題ニ付要求ス可キコトヲ予見シ得ベシ石井大使ハ人種差別撤去セラルルモ日本ハ紳士協約ヲ繼續スベシト述べタルモ永久之ヲ繼續スベシトノ確言ヲ与ヘズ從ッテ将来日本ハ聯盟ニ訴ヘ米國ノ立場ヲ覆ス時アルベシ大統領ハ過日帰國ノ際上院議員ニ向ッテ日本移民問題ハ聯盟原案ニテハ何等其支配ヲ受クベキモノニ非スト語レリ石井大使ハ大統領ト同一ノ見解ヲ持スル為特ニ原案ニ修正ヲ加ヘントスルモノナルベシ本問題ニ関シ労働界ニ於テ如何ナル態度ニ出ツベキカニ付テハ注意ヲ要ス

(三)上院共和黨議員 Pindexter 石井大使ハ日本人種差別ノ撤去セラレザル限り聯盟ニ加ハリテ其重要ナル利害問題ヲ多数外國ノ決定及支配ニ委スルコトヲ欲セズト述べタルハ最モ賢明ニシテ政治家の態度ヲ示セルモノナリサリ乍ラ移民問題ハ日本ニ取リテ重要ナルガ如ク米國ニ取リテモ重要ナリ随ッテ吾人ノ利益ヲ保護スル為米國モ聯盟条約面ニ明確ナル留保ヲナス必要アリ日米互ニ其主張ヲ固執スル時ハ聯盟ハ結局無効果ニ終ルベシ蓋シ此兩國ヲ除外セル聯盟ハ無益ナルヨリモ有害ナレバナリ

リ知ルコトヲ得ベシ独露日支四國ヲ除外セバ再ビ戦争ノ危険アルベシ太平洋岸ノ人民ハ移民禁止法ヲ除クガ如キ聯盟案ニハ賛成セザルベシ米國労働界ハ聯盟案ニ同意ナリト報ゼラルルモ移民問題ニ触ルルコト明瞭トナラハ恐ラク同意セザルベシ

在欧洲各大使ヘ転電セリ

三八四 三月十八日

内田外務大臣ヨリ
在米國石井大使宛(電報)

三月十四日紐有ニ於ケル演説電報方ノ件

第一九八号

過グル十四日紐有ニ於ケル貴官演説全文電報アレ

三八五 三月十九日

在米國石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種的差別撤廃ニ関スル紐有ニ於ケル演説報

告ノ件

第二三二号

(三月二十一日接受)

貴電第一九八号ニ関シ

(前略) and race prejudice has been fruitful source of discontent and uneasiness among nations in past, and

promises to be increasingly disturbing element for peace of future. unless proper remedy be brought upon the matter at this opportune moment. If the foremost object of the great Conference sitting in Paris is to establish a solid, permanent peace on earth, nothing would more effectively contribute to the attainment of this object than timely elimination of this cause of an international discord. In this world war, Associates fought side by side with Anglo-Saxons, Latins, Slavs against the common foes, Teutons, Turks, Bulgars. A single, unmingled object of war was the maintenance of international justice and the establishment of a durable peace. No consideration of racial feeling entered on supreme decision for sacrifices of blood and treasures on the part of any of the Allied and Associated Powers. And now when this war for international justice is about to come to happy termination, and when world league for permanent peace is being contrived, why this question of race prejudice, race discrimination, race humiliation should

alone be left unremedied? When the restriction or prohibition of discriminatory treatment against commodities are being adequately provided for, why should this unjust and unjustifiable discrimination against person be allowed to remain untouched? Idea, however good, loses most of its value if only half executed. The constitution of League of Nations for which eminent representatives of international justice and peace are now working in Paris with untiring energy would not be worthy of great world Conference, if it omitted necessary provision for remedy of this conspicuous injustice, arising out of race prejudice. It may be added, in order to avoid possible misunderstanding, that this question of straightening out existing injustice of racial discrimination should be considered independently of the question of labour or immigration. One is principally economic in nature while the other is essentially a question of sentiment, legitimate pride and self-respect. If any one is afraid that a stipulation introduced in the League Covenant for prohibition of

any discriminative treatment on account of racial differences will necessarily bring about labour difficulties or economic troubles, that man singularly overlooks actual facts of international intercourse. The existing Treaty between Japan and America guarantees to people of Japan the right of freely entering and residing in this country. In spite of this express stipulation, my Government invariably stick to policy of strict restriction of emigration into America. Why? Japanese Government and people understand that labour question in America constitutes exceptional circumstance which even solemn treaty cannot stipulate away in sweeping manner. While therefore they must not be expected to be content with situation, you can depend upon wise patience of Japanese nation who calmly though anxiously wait time when by gradual process of evolution this difficult matter may be finally cured and settled to mutual satisfaction of two countries. In the meantime, Japan, in faithful adherence to the spirit of what is called Gentlemen Agreement, will

continue the policy of strict self-imposed restriction in this delicate matter of labour emigration notwithstanding treaty right. This fixed policy of Japan, as abundantly attested by past records, will, I hope, disarm any alarmistic and unwarranted view pointing to probability of Japan's taking advantage of coveted article in the League Constitution against race discrimination with consequent relaxation in policy of emigration. I have no hesitation to state that nothing will be farther from Japan's thought than hastily force the issue of labour question, in the event of the League Covenant being modified in accordance with her desire, namely, upon new article being inserted in Covenant against racial discrimination.

(中絶) This world war has done away forever, let us hope, with wars of domination and oppression, and only wars we may yet have to fight in future will be wars of antisocialism, anti-bolshevism. In this forthcoming struggle, people of every nationality and of

every race should act in union against common foe, and all consideration of different creed or of different races should merge for all time and in all countries.
在欧洲各大使へ転電セリ

三八六 三月二十日 在米国石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

石井大使ノ人種問題演説ニ関スル巴里英字各紙報道及牧野全權ノ声明在仏大使ヨリ通報アリタルニ付転電ノ件

第二三四号 (三月二十一日接受)

在仏大使宛本使宛電報第三〇五号
貴官発大臣宛第二一六号ニ関シ当地「デーリー、メール」ハ仏国外務省ハ在米日本大使ノ紐育ニ於ケル演説中外国ニ在ル日本人ニ対シ当該国々民ト同様ノ待遇ヲ保障スル条項挿入セラレザル限り日本ハ国際聯盟条約ニ調印スルコト能ハズ云々ト述ヘタル趣ノ公電ニ接セリト記載シ尙国際聯盟委員会最終會議ニ於テ日本委員ハ平等待遇ノ決議案ヲ提出シタルガ右決議案ハ一般の且較々漠然タルモノニシテ日本

委員ハ強ヒテ其通過ヲ試ミズ再附議ノ権利ヲ留保セリ云々ト附言セリ

紐育「ヘラルド」巴里版ハ「デーリー、テレグラフ」通信ニ依レバ太平洋沿岸諸州選出ノ上院議員ハ人種の差別待遇撤去条項ヲ聯盟案ニ加フヘシトノ石井子爵ノ所言ニ甚タシク痛心セルモノノ如ク日本移民ノ襲来ハ米國ノ労働界ヲ危クスルノミナラズ國家其モノノ安危ニ関スルモノトシ斯カル条項挿入セラルルニ於テハ米國ハ聯盟ヨリ脱退スルノ外ナシト声明スルモノアリトノコトナリ然レドモ石井子爵ハ國民ノ感情、自尊心ノ問題タル本件ト移民労働問題トノ混淆スベカラザルヲ明言セラレ居ルヲ以テ右杞憂ハ全ク誤解ニ出ヅルモノト云フベシ西部上院議員ノ所説ハ互譲ノ道ヲ発見セムト欲スルモノノ如ク觀取セラル云々ト記載セリ
本問題ニ関シ牧野委員ハ紐育「ヘラルド」ニ対シ左ノ通声明セリ

It is reported that Viscount Ishii's Newyork Speech opposed Nations League unless including racial equalization clause. Baron tells Herald that position of Japanese Delegation unchanged since Herald interview more than

month ago. Japan pledged friendly support to the League principle and seeks racial national equalization recognitions as matter of principle. We have no intention to raise immigration question nor utilize equalization clause for that purpose. Baron speaking for Japanese Delegation reminded me one half world from east Suez to west San Francisco asked what practical hope there would be for League if ignored claims of more than half humanity.
大臣へ転電アリタシ

三八七 三月二十日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

国際聯盟案ニ関シ人種の差別問題等ノ我方修

正案不採用トナリタル場合ノ我方態度ニ付請

訓ノ件

講第三九七号 (三月二十六日接受)

国際聯盟案ト講和予備条約トヲ合体シテ提出スルノ儀ハ米國側ノ強硬ニ主張スル所ニシテ「ウィルソン」大統領モ帰仏以來其必要ヲ力説シ仏國側モ遂ニ之ニ反対セザルニ至レルモノノ如シ云々ノ新聞記事現レタルヲ機トシ三月十八日

牧野、珍田兩委員ハ「ハウス」大佐ニ会見ヲ求メ之等ノ点ニ関スル其所見ヲ叩キタルニ同大佐ハ兩案ノ同時ニ成立スルハ今後条約ノ実行上必要ナルニ付合体セシメタシト語り尤モ聯盟案ニ付十九日中立國側ノ意見ヲ聞キ其結果ニ依リ更ニ聯盟原案ヲ委員會ニ附スルコトナルベシト述ベ尙本委員等ノ問ニ答ヘ右原案ハ字句ノ不明晰ナル点モ有之些少ノ修正ヲ要スヘキモ其根本ヲ動かサガ如キコトハアラザルベク要スルニ多少ノ不備及意見ヲ修正調和スル(スミース、オーバー)ニ止マルヘシト云ハレタリ本委員等ハ予備条約草案モ今後二週間位ニハ完成シ敵國ニ対シ提出ノ準備整フ可キコトト察セラルル処夫迄ニ聯盟案モ提出ノ運ニ至リ得ル御見込ナリヤト尋ネタルニ同大佐ハ充分間ニ合セ得ベシト思考スト答ヘタリ依テ本委員等ハ貴電講第一五七号ノ内容ヲ示シ人種の差別問題ニ対スル本邦輿論ノ大勢ヲ指摘シタルニ同大佐ハ之ニ対シ同問題ガ各方面ニ亘リ輿論ヲ激成スルニ至リタルハ私力ニ遺憾トスル所ナリ日本ハ冷静ノ態度ヲ以テ本問題ニ処スルニ於テハ國際聯盟ノ將ニ成立セントスル事實ニ鑑ミルモ日本ガ實際其目的ノ實現ニ向ヒ前途甚タ有望ナル地位ヲ占メ居ルニアラスヤトノ所感ヲ述

へ又大統領ニ於テハ本問題ニ対シ依然曩日ノ態度ヲ繼續シ居ルト信スルモ果シテ如何トノ間ニ対シテハ自分ノ承知シ居ル限ニ於テハ何等變更ナシト信スル旨ヲ輕ク答ヘタリ右所感並ニ応答ヲ綜合翫味スル時ハ實際大統領ノ態度ハ帰米後ノ状況ニ顧慮シ多少ノ変更ヲ来シタルニ非スヤノ疑ナキ能ハス

刻下ノ事情上述ノ如クナルヲ以テ國際聯盟案ガ多少ノ修正ヲ以テ弥々確定ニ至ルベキハ向後一週以内ト見做ス方安全ナルベク此間ニ於テ本委員等ハ御訓令ノ趣旨ヲ体シ人種の差別問題其他一二点ニ関シ修正案ヲ提出シ極力其實徹ニ力ム可キハ勿論ノ儀ナリト雖モ状況急転ノ結果委員会ヲシテ修正案ヲ納レシムルノ望愈々益々薄弱トナリタル事情ハ各方面ノ情報ニ依リ予想ニ難カラサルヲ以テ最悪ノ場合即チ我提議不成功ニ終リタル場合ヲモ仮想シ本問題ニ対シ廟議御決定ノ上ハ至急御電訓ヲ仰キ度シ

三八八 三月二十一日

在ブエノスアイレス中村公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

在留外国人均等待遇ノ我方提案ガ容レラレザ
ル場合ニハ聯盟加入ヲ差控ヘ然ルベキ旨稟申

ヲ見ルコトモアラバ帝國政府ハ威圧の手段ニ依リ支那ヲシテ該條約締結ヲ余儀無クセシメタリトノ支那委員等ノ言ヲ立証スルノ結果トナリ世界ニ於ケル帝國ノ威信ハ為ニ地ニ墜チザルヲ得サルコトナルベシ依テ前記均等待遇ノ規定帝國ト外国トノ間ニ現存スル諸條約ハ國際聯盟ノ干涉外タルベキコトヲ明カニシ置カルル適當ノ措置ヲ講ゼラレンコトヲ切望ス

之ヲ要スルニ今回ノ國際聯盟ハ余リニ英米本位ニ傾キ殊ニ米國上院ノ反対ト抵触セザル様改正セントスルニ至リテ一層露骨ニ之ヲ表明セルモノト断ゼザルヲ得ズ但シ我方ニ於テハ英米ノ親善關係ヲ持續増進スルコトハ帝國ノ利益ト合致スルコト申ス迄モ無キ次第ナルヲ以テ帝國ノ私フベキ犧牲ノ甚大ナラサル限互譲ノ精神ヲ以テ聯盟成立方ニ助成スルコト時宜ニ適スル措置ナルベキハ勿論ナルモ前記二点竝東洋ニ於ケル帝國ノ地位確保方ニ関シ英米兩國ニ於テ我方ニ対シ好意的措置ヲ事実ニ於テ表明セザル以上止ムヲ得ズ我方聯盟加入ノコトヲ後日ニ留保スルト同時ニ帝國ノ立場ヲ世界ニ宣明シ此際寧ろ暫ク splendid isolation ノ地位ニ甘ンズルノ覚悟ヲ定メ以テ徐ニ後日ノ計ヲ為スコト帝國將

ノ件

第三八号

(三月二十七日接受)

新聞電報ニ依レバ帝國政府ハ國際聯盟協約中ニ一國ニ在住スル総テノ外国人均等待遇ノ規定挿入方ヲ提議セラレタルモノノ如シ本件ヲ一般の人種問題トセズ在留外国人均等待遇トセラレタルハ目下ノ事情ニ適合セシムル為最モ賢明ナル御措置ニシテ正義ト公正ノ点ヨリ見テ正々堂々(脱)ヨリ非難ヲ受クベキ寸隙ヲモ存セズ依ッテ我方ニ於テハ若シ容レラレズンバ聯盟加入ヲ差控ユルノ断乎タル決心ヲ以テ我主張ノ貫徹ニ力メラレンコトヲ切望ス今回平和會議開会以來ノ状況ヲ觀測スルニ帝國ノ關スル限り占領地処分問題ニ関シテハ同盟トノ敵然タル誓約アルニ拘ラズ帝國正當ノ期待モ終ニ其実現ヲ見ルコト覺束無キモノノ如ク之ニ加フルニ事ノ真偽ハ承知セザルモ在巴里支那委員等ハ青島問題ニ關スル日支條約ニ關シ屢傍若無人ノ發言ヲ敢テセル如キ新聞報道アリ為ニ世人ヲ誤解ニ導キツアルハ当然ナルベク若シ此問題迄モ國際聯盟ノ議題トセラレ關係薄キ他列國ノ判断ニ任セザルヲ得ザルガ如キ場合ニ遭遇セバ如何ナル結果ヲ見ルニ至ルヤモ計リ難シ万一我方ニ不利益ナル決定

来ノ為策ノ得タルモノナルベキヲ信ズ

三八九 三月二十三日

在米國石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

デーリー、メール所載セシル卿ノ國際聯盟ニ
關スル談話ノ一節報告ノ件

第二三六号

(三月二十四日接受)

在仏大使發本使宛電報第三〇六号
往電第三〇五号ニ關シ三月十九日当地「デーリー、メール」所載「ロード、セシル」ノ國際聯盟ニ關スル談話中左ノ一節アリ

As to Japanese suggestion voiced by Japanese Ambassador in America that League of Nations should prescribe that its members should accord equality of treatment to all inhabitants of their territories irrespectively of race and of colour, view of British delegation is that this would be interference with international affairs of members of League which was outside scope of that body.

外務大臣ニ転電アリタシ

三九〇 三月二十四日 在米國石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種問題演説ニ対スル反響報告ノ件

第二四二号

(三月二十六日接受)

本使紐育ニ於ケル人種問題演説ニ対シ当国人中之ヲ以テ政争ノ具ニ供セムトセル二三上院議員ノ外反對論ヲナセルモノナク新聞紙上公然賛成ヲ表スル勇氣ナキ記者達モ本使ニ向ヒテ我論旨ノ正確一点ノ非難スベキ点ナキ事ヲ述ブルモノ多ク個人トシテ本使ニ賀詞ヲ贈リ写ヲ求メ来ルモノ尠カラズ國際聯盟ヲ設クルモ日米労働問題ニ異状ヲ来タサズトノ点特ニ注意ヲ惹キタルガ如シ
在欧洲各大使へ転電セリ

三九一 三月二十四日

内田外務大臣ヨリ
在仏國松井大使宛(電報)

人種差別撤廃講演会及同撤廃期成会第二回大

会ノ模様通報ノ件

講第一九三号

(一)予テ米國ニ居住セシコトアル邦人ヲ以テ組織セラルル日星会ハ三月二十二日帝國ホテルニ於テ人種差別撤廃講演会

会生活ニ同化シ居ルカ故ナリ故ニ日本民衆ノ道德標準ノ向上ニ依リテノミ日米間ノ難問題ヲ解スルヲ得ヘシト論シ鎌田榮吉氏ハ福沢先生ハ既ニ古クヨリ人種の偏見ヲ撤スヘキヲ説カレタリト論シ「バイアス」氏ノ所見ニ賛成シ最後ニ大木伯ハ差別的待遇ハ文明の標準若ハ經濟の理由ニ基クト論スルモノアルモ首肯スル能ハズ現ニ日米兩國ハ交換教授ヲ為シ兩國ノ文明ノ紹介ニ努メツアリ唯風俗習慣ノ差異ハ存スルモノ之ハ文明ノ程度ノ標準ニアラズ各々文明ハ一長一短アリテ相殺スヘキナリ差別待遇ヲ以テ經濟の理由ナリト言フハ人ト物トヲ混淆シ物品ニ対スル保護關稅ノ趣旨ヲ人ニ適用セムトスルモノナリ要スルニ本問題ハ全ク人種の偏見ニ基クモノニシテ今ヤ此ノ感情ト偏見トヲ一掃スヘキ時ナリト論セリ

(二)三十七団体ヨリ組織セラレタル人種の差別撤廃期成会ハ第二回大会ヲ三月二十三日上野精養軒ニ於テ開催セリ来集者二百余名、杉田定一氏座長トナリ満場一致ヲ以テ「日本國民ハ人種の差別撤廃ヲ基礎トセザル國際聯盟ニ反對ス」トノ決議ヲ可決シ次テ実行委員ヲ挙ゲ有志ノ演説ニ移リ内田良平氏ハ人種の平等ヲ根底ト為サズバ平時ニ於テモ種々

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三九二

ヲ開催セリ来集者四百名、江原素六氏ハ日本ニ在リ日本人ヲ理解セル外人諸氏ガ本問題ノ解決ニ関シ努力セラレムコトヲ希望スト述ベ米國平和協會代表者「ボールス」氏ハ米國ニ於ケル日本人ノ差別的待遇ハ人種の理由ニ依ラズシテ經濟の理由ニ依ルモノナルヲ以テ誤解ナキヲ希望スト弁シ大隈侯ハ病氣不參ノ為箕浦勝人氏原稿ヲ代読シ世界ノ平和ハ人種の差別ノ撤廃ヲ必然要求ス此ノ合理的要求ニ対シ米國ニ於テハ反對ノ声アリト報スルモノアルモ誤電ナラムコトヲ希望ス、文明ハ進轉シ今ヤ人種の差別ヲ撤廃シ世界ハ正義ヲ原則トセサルヘカラズト論シ次ニ「ジャパン、アドヴァタイザー」紙主筆「バイアス」氏ハ本問題ハ日本ト米國若ハ濠洲トノ間ニノミ存スル特殊ノ問題ニ非スシテ世界ノ各所ニ存スル一般の現象ニシテ其ノ根本の理由ハ經濟的ニシテ人種のニアラズ故ニ徐々ニ經濟の問題ヲ解決シ國民ノ文明ヲ進メ世界萬民相融合シ正義平等ノ理想ヲ實現スヘシト論シ基督教青年會幹事「デヴィス」氏ハ不參ノ為メ原稿ヲ代読セシメタルガ要旨ハ本問題ハ道德の理由ニ依ルモノニシテ現ニ紐育市ニハ多数ノ日本人居住セルモ何等差別の問題ノ起ラサルハ教育アル日本人ハ亞米利加ヲ理解シ社

ノ事業ノ妨害トナルヘシ吾人ハ此ノ目的ヲ達セサレバ國際聯盟ヲ脱退スヘシ正義人道ノ為ノ孤立ハ寧ロ帝國ノ名譽ナラズヤト論シ副島義一氏ハ經濟上ヨリ見テモ日本労働者ハ英米ノ夫レニ劣ラズト論シ上泉中將ハ正義人道ニ基カサル國際聯盟ハ私利私慾ノ為ナリ吾人ハ之ニ反對セサルヘカラズト論シ仏國文學博士「リシャル」氏ハ歐米人ハ利害ノ打算ニ鋭敏ニシテ之ヲ包ムニ美麗ナル理想ヲ以テス古キ歐羅巴ニ求ムルヨリモ寧ロ之ニ与フルコトヲ期スヘシ亞細亞ハ自ラ覺醒シ亞細亞聯盟ヲ組織スヘシト論シ其ノ他数人ノ慷慨悲憤ノ演説アリテ散会セリ

三九二 三月二十五日

在仏國松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種の差別撤廃規定ニ関シ濠洲側及英米側ト
ノ交渉ノ經過報告ノ件

別電

三月二十五日在仏國松井大使發内田外務大臣宛
電報講第四四一号甲号及乙号

改訂案

講第四四〇号

(三月三十日接受)

往電第二九七号ニ関シ爾來濠洲首相ニ対シ累次会見ヲ求メ

四八三

タルニ拘ラス旅行又ハ病氣ニ藉口シテ之ヲ回避シ居ルカ如キ有様ニテ我ニ於テ此際我提案ニ顯著ナル改竄ヲ加フルニ非ザレハ到底其同意ヲ得ルノ望ナキ事情ハ愈々判明シタルヲ以テ別電第四四一号甲号ノ通之ヲ改定シタル上三月二十一日濠洲検事総長 Sir Robert Curran ヲ訪問シ詳細ニ我主張ヲ説明シテ首相トノ意見交換ヲ求メ又一面ニ於テ牧野珍田ハ同日「ハウス」氏ト会见ヲ遂ケ同案ヲ基礎トシテ意見ヲ交換シタル結果同氏ニ於テハ第一 equal ナル文字ヲ削除スルコト第二右提案ヲ聯盟規約中独立条項トセズ其前文ニ之ヲ挿入スルコトノ二点ヲ妥協条件トシテ我提案ニ同意スルコトトナリ尚提出ニ先タチ予メ英國側ノ反対ヲ除去スベキハ勿論ナリトノ了解ヲ以テ会见ヲ終リタリ翌二十二日ニ至リ「ヒューズ」氏ハ市外旅行中ナリトテ Curran ヲ介シ我カ提案ガ前案ニ比シ一層抽象的トナリタルニ拘ラズ其實質ニ至リテハ両者其探ヲ一ニスルカ故ニ遺憾ナガラ何分ニモ同意ヲ表スルコト能ハザル旨回答シ来レリ米英両國側ノ態度上述ノ通ナルヲ以テ更ニ我提案ヲ別電第四四一号乙号ノ如ク規約前文中掲載ノ形式ニ改メ同日「ハウス」氏ト会见シ同氏ヲ介シテ之ヲ大統領ニ提議シ其同意ヲ得タル

甲号

Article-Equality of nations being a basic principle of League of Nations, the High Contracting Parties agree to endorse principle of equal and just treatment to be accorded to all alien nationals of States members of the League.

乙号

By the endorsement of principle of equality of all nationals of States members of the League.

Matsui

三九三 三月二十六日

内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛(電報)

講和問題有志大会ニ於ケル人種差別撤廃、南洋占領諸島獲得、山東省独逸ノ權利獲得等ノ決議及演説ニ付通報ノ件

講第一九五号

講和問題有志大会ハ二月二十四日築地精養軒ニ於テ開會貴衆兩院議員其ノ他有志二百余名来集柳原伯開会ノ辞ヲ述ヘ津輕伯ヲ座長ニ推シ満場一致ヲ以テ(一)人種の差別ヲ撤廃ス

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三九三

ヲ以テ同二十三日牧野珍田ハ更ニ「セシル」卿ヲ往訪シ本問題ニ対スル我立場ヲ弁明シ且米濠洲側ニ対スル内交渉ノ成行等ヲ説述シタル上新案ニ対シ英國側ノ支持ヲ求メタルニ同卿ハ之ニ対シ私見トシテハ賛成ニ踴躍セザルモ本問題ノ畢竟濠洲問題タル事実ヲ指摘シ同卿限ニ於テ何等確定的応答ヲ与フルノ不可能ナル事情ヲ説キ何レ同僚ト協議ヲ重ネ可成其同意ヲ博スル様尽力シ次回委員会ニ先ダチ更ニ意見ヲ交換スヘキコトヲ約諾シタリ越エテ同二十四日該委員会間際ニ於テ再会シタルニ同卿ハ各領地首相等ニ於テ飽迄反対ノ態度ヲ固持シ居ル事情ヲ語り此上本問題ノ展開ヲ計ラントスルニハ直接右首相等ト会商シテ何等カ妥協ノ道ヲ講スルノ外他ニ方法ナシト信スル旨ヲ述ベタルヲ以テ我ニ於テハ欣然右勧告ニ応スヘキ旨ヲ答ヘ會議開催ニ関シ此上トモ同卿ノ斡旋ヲ請ヒ置キタリ右会商ノ結果如何ハ未定ニ属スルモ本案件是迄ノ経過一応具報ス

英米伊ヘ転電セリ

(別電)

三月二十五日松井大使宛内田外務大臣宛電報講第四四一号甲号及乙号

ルコト(二)南洋占領諸島ハ当然之ヲ獲得スルコト(三)山東ニ於ケル独逸ノ利権ハ当然之ヲ獲得スルコト(四)支那ニ関スル條約上既得ノ利権ハ当然之ヲ保持スルコト(五)東亞ニ於ケル帝國ノ優越地位ヲ確立スルコト(六)徴兵制度ノ廃止ニ反対スルコト(七)国情ニ適セサル國際労働法ニ加入セサルコト(八)附帯決議トシテ速ニ露西亞並西比利亞ニ対スル根本策ヲ樹立スルコト等ノ決議事項ヲ可決シ次テ実行委員十八名ヲ挙ゲ演説会ニ移リ高橋作衛氏ハ日本ハ宜シク自主的外交ヲ徹底セシムヘシト論シ大木遠吉伯ハ今日人種の差別撤廃ハ英米仏其ノ他何レノ國人ト雖モ反対スベキ理由ナシ正義、人道、永遠ノ平和ヲロニシナガラ此ノ案件ニ触レズシテ平和會議ニ臨マムトスルハ實際ニ於テ此等ノ觀念ヲ根底ト為サザルノ証左ナリ米人ノ如キ久シク邦人ト融和セズ徒ラニ邦人ヲ排斥セルハ自ラ文明人ト称シナガラ矛盾ノ甚タシキモノナリト論難シ副島義一氏ハ人種問題ニハ移民問題ヲ含マスト論スルモノアルガ如キモ移民問題ヲ含マサル人種問題ハ何等ノ価値ナシト論シ陸軍中将佐藤鋼次郎氏ハ外交ノ振ハサルハ背後ノ國民的勢力ノ微弱ナルカ故ナリ國民外交ハ刻下ノ急務ナリト力説シ次テ二三ノ演説アリ最後ニ実行委員ハ

其ノ趣旨貫徹ノ為首相外相ヲ歴訪シ當日ノ決議ヲ在巴里全權委員ニ打電スルコトニ決定シ散会セリ

三九四 三月二十六日 在ブエノスアイレス中村公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

在留外国人均等待遇ノ我方提案ガ英米等ノ支
持ヲ得ザル場合ニハ聯盟加入ヲ差控フルコト
ヲ切望スル旨重ネテ稟申ノ件

第四〇号 (三月二十八日接受)

往電第三八号ニ関シ

我方ヨリ均等待遇問題ヲ提議セルコト既ニ外間ニ周知セラ
レ居ル次第ナルヲ以テ他ノ反対ノ為之ヲ撤回スルカ如キコ
トアラハ我方自ラ本邦人種差別待遇ヲ承認スルノ結果トナ
リ将来南米諸国ハ勿論世界到ル処本邦人対等發展ニ甚大ナ
ル悪影響ヲ誘致スルコト必然ナルヘシ殊ニ在巴里労働會議
ハ我方ノ希望ト正反對ニ移民問題ヲ各国内政干係トシ國際
聯盟ノ管轄外ナルコトヲ明カニセルヤノ報道アル今日若シ
我提案ニ係ル均等待遇問題迄モ成立セシムルコトヲ得サル
ニ於テハ我方ノ顔ハ丸潰レトナリ為ニ世界ニ於ケル帝國ノ
國際的威信ヲ失墜スルコト甚大ナラサルヲ得ス之ヲダモ

記

第一案 別電第二一〇号ノ如キ宣言ヲ聯盟規約ノ附属トシ
テ添附スルト共ニ該宣言ニ対シ列國委員ヲシテ了承ノ旨
(Prendre acte) ヲ言明セシムルコト (Sir Ernest Satow's
Diplomatic Practice Volume 2 page 218 御参照アリタム)

第二案 単ニ宣言ヲ規約ノ附属トシテ添附スルニ止ムルコ
ト

第三案 該宣言ヲ會議録ニ記入セシムルコト
若シ右三案中ノ第三案ニシテ尚成功シ難キ場合ニハ乍遺憾
聯盟規約調印方一時御見合ノ上直ニ詳細ノ成行ヲ具シテ請
訓セラルル様致シタシ

(別電)

三月三十日内田外務大臣松井大使宛電報講第二一〇号
人種の差別待遇撤廃ニ関スル日本委員宣言案

講第二一〇号

In proceeding this day to the signature of the Cove-
nant for the League of Nations, the Japanese Pleni-
potentiaries declare their earnest expectation that, having
particular regard to the basic principles of the League

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三九六

尚忍ンテ聯盟加入ニ甘ンズルカ如キハ如何ナル事情ノ下ニ
モ帝國将来ノ為断シテ避クヘキ儀ト思考スルヲ以テ万一英
米諸国ニ於テ我提議ヲ支持セサルニ於テハ断固トシテ此際
我方ノ縮盟加入ヲ差控ヘラレンコトヲ切望ス

本官ヨリ斯ル申出ヲナスコトハ或ハ余計ナルコトナルヤモ
量リ難シト思考スルモ巴里會議ノ状況日ニ日ニ我ニ非ナル
形勢ヲ見テハ帝國将来ノ為憂慮ニ堪ヘス敢テ屢々卑見上申
ニ及ヒタル次第重ネテ御了承ヲ請フ

三九五 三月三十日 内田外務大臣ヨリ
在仏國松井大使宛(電報)

人種の差別待遇撤廃問題ニ関シ回訓ノ件

別電 同日内田外務大臣宛在仏國松井大使宛電報講第
二一〇号

人種の差別待遇撤廃ニ関スル日本委員宣言案

講第二〇九号

貴電第三九七号ニ関シ

人種の差別待遇撤廃ヲ期セムカ為ニハ閣下等ニ於テ此上共
極力御尽力アリタク尚右ニ不拘會議ノ形勢上我提議到底成
功シ難キ場合ニハ閣下等ノ裁量ニ依リ左記三案ノ一ニ從ヒ
可然御措置相成度シ

of Nations, each of the States, members of the League,
will refrain from exercising discriminatory treatment
either at law or in fact in respect of nationals of any
other State, which is a member of the League, on grounds
of race or nationality. Uchida.

三九六 三月三十日 在仏國松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種差別撤廃案ヲ濠洲首相拒否シ、ハウス及
スマツ両氏等トモ協議セルモ全ク行詰トナ

レル經過報告ノ件

講第四七一号(至急) (四月二日接受)

往電第四四〇号ニ関シ

三月二十五日加奈陀首相ノ寓居ニ於テ商議會ヲ開催シ我方
ヨリハ牧野、珍田両委員、首相側ヨリハ加奈陀濠洲「ニュ
ー・ジラランド」、「ニュー・ファンドランド」各領地首相
外ニ General Smuts 及 Lord Robert Cecil ノ二人出席
殆ト二時間ニ亘リ擬議シタルモ結局不得要領ノ裡ニ散会セ
リ会谈中彼我応答ノ肯綮ヲ摘録スレバ左ノ如シ

本員等ハ往電第四四一号乙号形式ニ基キ我提案ガ専ラ主義

ノ闡明ヲ以テ其眼目ト為シ所謂移民問題トハ直接ノ関聯ナキ所以ヲ弁明スルト同時ニ本件ニ対シ本邦國論ノ熱烈ナル実況ヲ説述シテ切ニ首相等ノ同意ヲ求メタルニ首相等ハ之ニ対シ日本ノ主張ハ充分諒トスル所ナリト雖モ提案ノ適用ハ其性質上日本人ノミニ局限スルコト能ハズ支那人印度人等ヲモ包含セザルベカラザル事体ニ鑑ミ、Equality ナル文字ヲ改竄スルニ非ザレバ同意ヲ表スルコト極メテ困難ナル旨ヲ力説シ本員等ハ本邦ニ於ケル輿論ニ照ラシ此一語ハ提案ノ骨髓ニ属シ之ガ改竄ハ致命的負傷ナル理由ヲ説キ飽迄其維持ニ努メ彼我討議ノ結果加奈陀首相「ボルデン」氏ハ左ノ妥協案即チ

.....by the endorsement of the principle of the equality between States and just treatment of their nationals.....ヲ按出シ先ヅ首相側ノ同意ヲ求メタルニ多数ハ妥協ノ誠意ヲ以テ全然之ニ同意ヲ表シタルモ独リ「ヒューズ」氏ニ至リテハ全ク独立独行ノ態度ニ出デ日本代表者ノ主張ニ対シテハ同情ナキニ非ザルモ濠洲輿論ノ代表者タル余ノ立場トシテハ徹頭徹尾反対ノ態度ニ出ヅルノ外ナシ要スルニ本提案ハ措辭行文ノ問題ニ非ズ其背後ニ潜伏セル思想自体ハ濠

ナラズ其性行ノ剛愎狷介ナルヨリ見ルモ漫然干渉ヲ試ムルニ於テハ却テ益々其反抗ヲ挑発スルヤモ計リ難シトノ意見ヲ陳ベタルヲ以テ本委員等モ此際専ラ「スマッツ」「マッシー」両氏ノ尽力ニ信賴シ其結果ヲ俟ソコトニ決セリ越エテ二十七日日本委員等ハ更ニ「ハウス」大佐ヲ訪問シ前記妥協案ヲ示シ首相連ト会商ノ成行ヲ詳説シタルニ新案ニ対シテハ何等故障ナク「ヒューズ」氏ノ言動ニ関シテハ彼ガ大統領ト衝突シタルコト一再止マラザル事実ヲ指摘シ今次ノ態度モ或ハ間接ニ大統領反抗ノ動機ニ出デタルヤモ難計頗ル焦慮シ居ルガ如ク見受ケラレタリ

更ニ二十九日「オルランド」「ハウス」「スマッツ」牧野ノ四名ヨリ成ル国際聯盟本部位置審議小委員会ノ開カレタル際本議題討議ノ終了ヲ待チテ「スマッツ」氏ハ牧野ニ向ヒ前日約束ノ通り其後「ヒューズ」氏ト会見シ其態度ヲ諷サシコトヲ極力勸告シタルモ自分ハ決シテ日本ニ対シテ反対ヲ持スルモノニ非ズ只支那人ノ濠洲入国ヲ主張センコトヲ憂フルモノナリトノ説ヲ繰返シ頑トシテ動かズ若シ日本ノ提案ニシテ聯盟規約案中ニ採納セラルルガ如キ場合ニハ総會議ニ於テ反対演説ヲ試ミ右提案ノ結果当然移民問題ノ誘

洲人百中九十五人ノ拳ゲテ排斥スル所ナリト極言シ毫モ妥協ノ誠意ヲ示サズ首相連カ温言以テ其反省ヲ促シタルニ対シ諸君ノ行動ハ諸君ノ自由ナリ余ハ余ノ本領ヲ守ルノミト豪語シテ協議中央ニ其席ヲ去リタリ首相等ニ於テハ頗ル感情ヲ害セラレタル模様ナリシニ拘ラズ共同動作ノ必要上第一ニ同氏ノ得心ヲ得ルヲ以テ先決問題ト認メ本員等ニ向ヒ時日ノ猶予ヲ求メ其儘散会ノ止ムナキニ至リタル次第ナリ首相等ノ内話ニ抛ルニ「ヒューズ」氏ノ態度ハ畢竟近キ将来ニ於ケル総選舉ノ為ナル由新西蘭首相「マッシー」氏モ亦同様ノ境遇ニ在ルガ故ニ賛否トモ「ヒューズ」氏ト行動ヲ共ニセザルヲ得ザル立場ニ居ル趣ナリ隨テ提案ノ成否ハ懸ケテ濠洲首相一人ノ向背ニ存スルノ形勢トナレリ翌二十六日本委員等ハ「スマッツ」氏ヲ往訪シ前掲妥協案中States Nations ト改メ同意ノ旨ヲ確答スルト同時ニ此際本委員等ニ於テ英本國首相ノ支持ヲ求ムルノ要否ニ関シ其所見ヲ叩キタルニ同氏ハ之ニ対シ「ヒューズ」氏ノ講和委員タル資格ハ全然本國ト没交渉ナル事実ニ顧ミ英國首相ガ何等掣肘ヲ加ヘ得ベキ地位ニ在ラザルハ勿論元來同氏ハ局量狭小ニシテ國際ノ大局ヲ顧念スルガ如キ人物ニアラザルノミ

致セラルルヘキヲ力説スベク而シテ万一其通過ヲ見ルガ如キコトアラバ濠洲ノ代表者タル自分ハ聯盟規約ノ調印ヲ拒絶スベシト極言セル趣ヲ語リ又「マッシー」氏モ自分一己トシテハ日本ノ提案ニ異議ナク從來「ヒューズ」氏ノ説得ニ勸メタル次第ナルモ「ヒューズ」氏ニシテ飽迄提案ニ反対ナル以上新西蘭ノ政情ニ顧ミ同氏ト同様ノ態度ヲ採ルノ外ナシト語レル趣ヲ述べタル後自分ノ努力ハ遂ニ無効ニ終リタル次第ナルガ事情此ノ如クナルニ於テハ甚々年遺憾英國政府自体モ領土首相等ヲ支援シ提案ニ反対スルノ外ナク從テ此上聯盟規約ニ提案記入ヲ計ルモ無益ナルベキニ付目下經濟委員會ニテ調査中ナル貿易条件中機會均等等ノ事項ヲ規定スル條約 Convention ノ形式ニテ日本ノ満足セラルル様問題解決ノ方法ヲ案出シ得ザルベキカトテ折角考量中ナル旨ヲ述べ我熟慮ヲ求メタルニ付牧野ハ其尽力ヲ深謝シタル後乍然事態ハ洵ニ重大ト相成リタルモノト云ハザルベカラズ我方ニ於テハ既ニ極端迄其正当公明ナル主張ヲ讓歩シタル今日尚「ヒューズ」氏ノ不理不当ナル反対ニ遭フハ甚ダ心外ノ至ニシテ本件ニ関スル打合ノ内容及事態ノ成行ハ何レ悉ク世人ノ知ル所トナルベク我國民ニシテ独リ「ヒ

ユーズ」氏ノ頑強ニ反対シタルガ為我主張ノ貫徹セラレザリシヲ審カニスル曉ニハ到底其儘ニ事態ヲ甘受黙諾セザルベキハ云フ迄モナキ事ナルヲ説述セリ其際恰モ「オルランド」氏トノ會談ヲ了シタル「ハウス」大佐モ參加シ「オルランド」氏ハ退出「スマッツ」氏ヨリ上述「ヒューズ」氏説得成行ノ大要ヲ聴取シタル後「ヒューズ」氏ニシテ總會ノ際移民問題ヲ提起シ聯盟案ノ進捗ニ妨害ヲ加フルガ如キコトアラバ米國西部ニ於テ非常ノ難局ヲ生ジ大統領ハ全ク苦境ニ陥リ結局日本ノ提案ニ反対スルノ外ナキニ至ルベシトノ意見ヲ披瀝シタルニ付牧野ハ英米側ノ立場ハヨク之ヲ諒得セリ而氏ノ尽力斡旋ニ拘ラズ今日ノ事態ニ立至リタルハ洵ニ遺憾至極ト云ハザルベカラズ乍然余ハ我方ニ於テ到底其立場ヲ變更スルコト能ハザルヲ信スルモノニシテ今後モ同様ノ主張ヲ維持シ機會アル毎ニ其貫徹ニ勸メント欲ス我國民ノ期待并ニ其主張ノ正当ナリトノ確信ハ決シテ之ヲ顛弄 Trifle スルコトヲ許サズト言明セリ「スマッツ」「ハウス」両氏ハ之ニ対シ新ニ提議スルコトナカリシヲ以テ牧野ハ「スマッツ」氏ト更ニ打合ヲナスベキ旨ヲ約束シテ引取りタリ

在欧米各大使ニ電報セリ

三九七 三月三十一日

在米國石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種問題ニ関スル米國ノ反対ハ日米國交ヲ阻害スルコトナカルベキ旨米紙報道ノ件

第二六五号

(四月二日接受)

三十一日明カニ國務省筋ヨリ出テタリト認メラルル左ノ如キ記事二三ノ新聞ニ現ハル
平和會議ニ於テ「モンロー」主義人種平等問題等ニ関スル會議カ如何ナル決定ヲ見ルモ日米ノ國交之ニ依リテ阻害セラルルコトナカルヘシ日本政府及識者階級ハ人種問題ニ関スル米國ノ反対ヲ冷靜ニ迎ヘツツアル趣ニテ米國人中日本ノ提議ノ正当ナルヲ認ムルモノ多キ如ク日本ニ於テモ移民問題ニ関スル米國ノ立場ヲ至當トスルモノ少カラス現ニ石井大使モ過般ノ演説ニ於テ特ニ此点ニ関シ米人ニ安心ヲ与ヘント勉メタリ日本ノ現自由派政府カ米國ト協調ヲ欲スルハ西比利亞問題等ニ依リ例証セラル最近天津事件等一二波乱ヲ見タルモ重大ノ結果ヲ来ササルヘキハ勿論ナリ自由主義ノ政友會政府カ政柄ヲ握レル事及選舉法改正ノ結果新タ

ニ一百万ノ有權者ヲ生シタル等日本ニ於ケル民主主義ノ進展ハ有望ナル兆候ヲ示スモノアリ官僚主義ノ野心ニ伴フ誤解紛争ハ之ニ依リテ除去セラルヘシ云々
巴里ニ転電セリ

三九八 四月一日

内田外務大臣ヨリ
在仏國松井大使宛(電報)

國際聯盟規約前文ニ於テ人種の差別撤廃ニ言及スル案ニ関シ右ノ外我全權委員ノ執ルベキ措置ニ付訓令ノ件

講第二一四号

貴電講第四四〇号ニ関シ貴電講第四四一号乙ヲ規約前文中ニ挿入スル案ハ其ノ貫徹スル様閣下等最善ノ御尽力ヲ希望スルト同時ニ該案ニシテ幸ニ通過スルモ右ノミニテハ或ハ日本ハ聯盟各國ハ人種又ハ国籍ノ理由ニ基ク法律上又ハ事實上ノ差別的待遇ヲ他ノ聯盟國國民ニ加フルコトヲ避クヘシトノ主張ヲ譲リタルモノナリト解セラルルノ虞アルヲ以テ(一)右貴案ヲ通過セシムルト共ニ尚往電講第二〇九号別電同第二一〇号ノ宣言ヲ會議録ニ記入セシムルコトニ致度(二)

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 三九八 三九九

若シ万一右記入方同意ヲ得難キ場合ニハ前記貴電講第四四一号乙ヲ規約前文中ニ挿入セシムルノミニテ調印セラレ差支ナシ(三)將又不幸ニシテ右規約前文中挿入ノ案モ遂ニ採用セラレサル場合ハ總テ往電講第二〇九号ノ通り御措置相成リタシ
前記何レノ場合ニ於テモ本規約最終確定案カ講和予備總會議ノ議事ニ上ル際ニハ閣下等ハ往電第二一〇号宣言案ノ趣旨ヲ敷衍シテ帝國ノ地位ヲ明瞭ニ宣明セラレタシ
在米大使ヘ転電アリタシ

三九九

四月二日
内田外務大臣ヨリ
在仏國松井大使宛(電報)

人種の差別撤廃期成會及講和問題有志大会ノ各代表者ヨリ決議書提出ノ件

講第二一七号

人種の差別撤廃期成會代表者田辺安之助、上泉徳弥、大久保高明、葛生能久ノ四氏ハ三月二十四日日本大臣ヲ來訪シ同日附講第一九三号後段ノ決議書ヲ手交シ又講和問題有志大會代表者津輕伯、高橋作衛、佐藤鋼次郎其ノ他数名ハ四月一日原首相ヲ官邸ニ訪問シ三月二十六日附講第一九五号同

様ノ決議書ヲ手交セリ

四〇〇 四月二日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

人種問題ニ関シ牧野珍田スマッツ氏ト協議シ

並我國論ノ状況ヲ説明シタル件

講第四八八号

（四月四日接受）

往電第四七一号末段英米側ノ提言ニ関シ三月三十日牧野珍田ハ「スマッツ」氏ヲ訪問シ西園寺侯以下我全権ニ於テ「コンヴェンション」ニ関スル右考案ニ対シ慎重ノ考量ヲ加ヘタルモ結局我提案ノ正当ニシテ且極メテ穩健ナル性質ト本邦輿論ノ益々熱誠ナル事実トニ顧ミ聯盟規約中我主張ノ提案ヲ掲載スルコト以外ニ於テ我國論ノ要求ヲ緩和スルノ方法ヲ求ムル事絶対不可能ナリトノ意見ニ帰着シタル旨ヲ陳弁シタルニ同氏ハ之ニ対シ本件ノ難問題タルヤ言ヲ要セザルモ此際何等カノ方法ヲ講シテ他ニ新生面ヲ開クニ非ザレバ刻下ノ行詰ヲ疏通スルノ見込立タズ自分ハ此点ニ関シ苦心慘澹考量中ナルガ或ハ通商及移民問題等ニ関シ純然相互の基礎ニ於テ「ゼネラル、コンベンション」ヲ締結ス（脱）ナリトノ意見ヲ漏ラシタルヲ以テ本員等ハ如斯方法

ヲ以テ我提案ニ対スル代償ト認ムル事能ハザルハ勿論此ノ趣意ノ考案ガ日米移民問題ニ関聯シ再応米國側ヨリ提言シタルモノニシテ其形式ハ相互のニシテ一見公平ナルカ如キモ其實質ニ於テハ全然事実ヲ無視シ結局朝三暮四タルヲ免カレズトノ理由ヲ以テ毎度日本側ノ反対シタル所ナリトノ来歴ヲ語り要スルニ刻下ノ行詰ニ処スヘキ唯一ノ方法ハ去ル二十八日ノ會談中同氏カ珍田ニ向ヒ万一融和ノ途ナキ場合ニ於テハ委員會ニ於テ我提案ヲ可決シ總會ニ於ケル濠洲首相ノ反対論ハ之ヲ不問ニ附シ去ルノ外ナシト語りタル（脱）引援シテ其決心ヲ促シタルニ対シ此点ニ付テハ「ヒューズ」氏ノ態度予想以上ニ強硬ニシテ聯盟規約ニ記名ヲ拒否スルノ決意ヲ以テ總會ニ於テ極力抗争ヲ試ミ以テ世論ヲ激成セントスルノ覚悟ナルカ如シ果シテ然ラハ米國ニ於ケル反対論ノ気焰ヲ煽リ容易ナラザル情勢ヲ挑発スルニ至ルヘク之レ米國側力是非共之ヲ防止スルノ必要ヲ感スル所以ナリ一面本國ニ対シテハ濠洲多大ノ戦争犠牲ヲ忘却シ其主張ヲ無視シタルトノ攻撃ハ本國政府ニ取り最モ苦痛ヲ感スル所ナリトテ到底前述ノ如ク高圧手段ニ出ヅル事能ハサル事情ヲ縷述シ結局他ニ何トカ展開ノ途ヲ講ズヘシトテ当

日ノ會見ヲ終リタリ尚右會談中本員等ハ本邦ニ於テ諸団体ノ陸統集會ヲ催シ居ル実況ニ話及シ輿論ノ熱誠愈々其度ヲ加ヘ一派ノ政論家カ本問題ノ満足ナル解決ヲ見ザル以上ハ帝國ハ断然國際聯盟ニ加入スベカラズト極論スルノ情勢ヲ指摘シ此際若シ我主張ヲ拒否スル時ハ國論激昂シ不加盟論其勝ヲ制シテ或ハ政府ヲ余儀ナクスルニ至ルヤモ計リ難キ事由ヲ詳説シ切ニ同氏ノ猛省ヲ促シ置キタリ翌三十一日本委員等ハ更ニ「ハウス」大佐ヲ訪ヒ上述會談ノ模様ヲ告ケ大体同一ノ趣旨ヲ以テ米國側ノ支持ヲ依頼シタルニ同大佐ハ今日ノ如キ行詰ニ逢着シタルヲ憤慨シ之カ対応策トシテハ若シ英國側ニ於テ断然タル態度ニ出ヅルニ於テハ米國ハ之ト行動ヲ共ニスル事ヲ辞セザルベシト語り万一日本國民カ本問題ニ対スル米國ノ態度ヲ誤解スルカ如キコトアリテハ兩國将来ノ國交上憂慮ニ堪ヘザル所ナリト附言セリ同日午後「スマッツ」氏ノ需ニ応シ本員等往訪シタルニ同氏ハ往電講第四八九号具報ノ聯盟規約修正条項中ニ適例トシテ移民法及帰化法ヲ列挙スヘシトノ修正案ヲ「ヒューズ」氏ニ提言シタルニ同氏ハ之ヲ考慮スヘキ旨ヲ答ヘ多少感応シタル有様ナリト語りタルニ付本員等ハ右ノ如キ将来國際聯

盟ニ於テ決スヘキ全然未定ノ問題ヲ此処ニ例示スルカ如キハ本員等ノ絶対ニ反対セザルヲ得ザル所ナル事由ヲ述ヘ且日米移民問題ニ関聯シ日米旧条約ノ所謂第二項ノ削除ニ纏綿シタル詳細ノ歴史ヲ説明シ速ニ右提言ヲ撤回センコトヲ請求シ置キタリ
英米伊ヘ転電セリ

四〇一 四月五日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

人種的差別撤廃規定問題ニ関スル訓令ノ三案

二付所見稟申ノ件

講第五〇八号

（四月七日接受）

貴電講第二一四号ニ関シ往電講第四四一号乙ヲ規約前文中ニ挿入スルコト能ハサル場合ニハ貴電講第二〇九号所載ノ三案ヲ試ムヘキ旨御訓令ノ次第敬承御趣旨貫徹ニツキテハ往電講第四七一号ニテ具報ノ通り引続キ精々努力中ノ処万一ノ場合ヲ慮リ一応申進シ置キタキハ貴電講第二〇九号所載三案ノ儀ニ有之即第一案及第二案ノ如ク宣言ヲ規約ノ附属トシテ添付スルコトハ Prendre acte セシムルト否トニ拘ラズ結局規約ノ一部分ヲ為スコトナリ之ヲ提議スルモ

殆ど成功ノ見込無ク且成否ノ如何ヲ問ハズ之ヲ提議スル場合ニモ前以テ重ナル委員ト交渉ヲ遂ケ置クコト絶対ニ必要ナルモ目下前文中ニ一定ノ字句ヲ挿入スルコトニツキ此等委員ト交渉ヲナシツアル際更ニ右附属書ニツキ交渉スルトキハ我方ニ於テ前文ノ問題ヲ譲歩シタリト認メラルル嫌モアリ旁々実行頗ル困難ナリト認ム第三案ハ固ヨリ可能ノコトニ属スルモ左ノ如キ事情ナルニ付予メ御承知置アリタシ即チ今回ノ會議ニ於テハ總會議ハ勿論委員會ニ於テモ各員ノ發言ハ如何ナル事項ニテモ希望ヲ表明スルニ於テハ差シタル困難ナク夫々「プロトコール」若ハ「プロセ・ヴェルバール」ニ記入セラレ居ル次第ニシテ其載否ニ付キテ別ニ討議ヲ重ヌル義ニアラズ從テ最後ノ場合總會議ニ於テ貴電講第二一〇号ノ宣言ヲ朗読シ且其主意ヲ敷衍シテ帝國ノ地位ヲ明瞭ナラシムルノ演述ヲナスニ於テハ右ノ宣言及演述ハ共ニ「プロトコール」ニ記入セラレ別ニ貴電講第二一〇九号末段所載ノ如キ成功不成功ノ問題ヲ生ゼザルノミナラス「プロトコール」ナルモノハ例ヘン日清滿洲善後談判會議録ノ如ク特ニ拘束力ヲ有スルモノニアラズ右為念申進ズ

involving as it may the consequences which we fully explained to you and which we have so much at heart to obviate.

We recollect of the promise which you were good enough to give us, that you would consult with President Wilson with a view to having the final meeting postponed pending your endeavours for smoothing over the existing difficulties regarding the question.

In this predicament, we take the liberty to trespass again upon your kindness and to lay the whole situation before you for such action as you may deem it advisable to take under these urgent circumstances.

Thanking you in advance for your kind intercession in the matter, I have the honour, my dear Prime Minister, etc.

(Signed) Chinda.

四〇三 四月九日

内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛 (電報)

人種の差別撤廃ノ主張否決ノ場合ニハ日本ハ

聯盟ヲ脱退スベシトノ国民新聞掲載大隈侯談

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 四〇三

四〇二 四月七日

在巴里珍田大使ヨリ
英國総理大臣宛

人種の差別撤廃案ヲ現段階ニ於テ提出セバ否
決必至ナルベキニ付國際聯盟委員會ノ開會延
期ヲ計ハレ度旨依頼ノ件

Strictly Confidential.

April 7th, 1919.

Dear Prime Minister,

With regard to the subject of our conversation of Thursday last, Baron Makino and I have just learned much to our discomfure that the committee for the League of Nations is going to be convoked tomorrow, and that, in the opinion of Lord Robert Cecil the meeting would likely be the final one, so far as the committee is concerned. This will then be the last and only chance left us for presenting the amendment which we submitted to you on the occasion above alluded to. For the reasons already explained, the presentation of our case at the present juncture, would be simply courting its rejection

通報ノ件

講第二三八号

四月六日ノ国民新聞紙上ニ大隈侯談トシテ掲載セル論說ノ要旨

人種の差別ノ撤廃ハ断乎トシテ之カ貫徹ヲ期セサルヘカラス帝國ニ取リ此ノ問題ヨリ緊急且重大ナルモノ他ニナシ英國ハ既ニ一世紀前枢密院令ヲ以テ民族平等待遇ノ實現ヲ公表シ又米國ハ六十年前ニ四箇年ノ内乱ノ後奴隸ノ解放ヲ為シタルニアラズヤ「ワシントン」大統領ノ独立宣言ハ嘗ニ米國民ノ為ノミニアラズ世界人類ノ為ニ其ノ權利ヲ主張シ正義ニ基キ平等ノ待遇ヲ宣シタルモノナリ然ルニ其ノ後米國民ノ態度ハロニハ正義平等ヲ提唱セルモ事實ノ之ニ反スルモノアルハ甚ダ遺憾トセサルヲ得ス曩ニ米國ハ我カ鎖國政策ニ対シ人類ノ幸福増進ノ為開國ヲ促シ「タウンセン」ト「ハリス」等ノ如キハ平等待遇ヲ力説シタリシニ五十年後ノ今日ニ至リ我ガ移民ノ入國ヲ禁シ差別ノ待遇ヲ為シツツアルハ矛盾ノ甚タシキモノト言ハサルヲ得ス吾人ハ人種問題ニシテ否決セラルルニ於テハ聯盟ヲ脱退スルノ覺悟ナカルヘカラス今ヤ欧米列強ハ砲火ノ殺傷ヲ避ケ道德的政治

的ニ人類ノ殺傷ヲ為サムトスルガ如シ吾人ハ明治大帝ノ「万国ニ対立スヘシ」トノ御勅旨ヲ奉シ飽ク迄モ此ノ目的ノ貫徹ニ努力スヘシ云々

四〇四 四月十一日 在シドニー清水總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種の差別撤廃規定案ニ関スル牧野全権ノ談話
二付濠洲代理首相ノ為シタル陳述報告ノ件

第三八号 (四月十二日接受)

牧野男ハ四月六日「シドニー、サン」ノ通信員ニ会見、國際聯盟條約ニ挿入スベキ人種の均等待遇ニ関スル改正案若シ通過セザルニ至ラバ日本ノ公論ハ其ノ責任ヲ濠洲ニ帰スベキ旨声明セラレタル由巴里ヨリノ新聞電報四月十日当地新聞ニ發表セラレ同時ニ「サン」ノ在「メルボルン」代表者ハ牧野男爵会見談ヲ代理首相ニ示シタルニ同官ハ右ニ関シ左ノ通り陳述セル由ナリ

In this as in all important matters, touch between Mr. Hughes and his Colleagues in the federal Cabinet is in time and sometimes daily. My information does not justify me in believing that Australia is the only barrier

among the national forces against Japanese scheme for recognition of racial equality.

尚通信員ハ日本ノ修正案ハ明カニ個人ノ平等ヲ認メシムルニアリテ移民又ハ労働問題ニハ触レ居ラズ日本現政府ハ之ヲ以テ sleeping stone トナスノ意ナキハ保証スルニ躊躇セザルガ如キモ政府ハ交渉スベキモノナレバ交渉後ノ政府ノ行動ヲ拘束シ難カル可シ云々ト附言セリ
英仏ヘ電報セリ

四〇五 四月十三日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種差別撤廃問題ニ関シ濠洲首相ノ反対ニヨリ行詰ハ打開絶望的ナル旨報告ノ件

講第五五六号

往電第四四〇号具報後「スマッツ」將軍ハ急遽匈国方面ニ出張スルコトナリタルヲ以テ牧野珍田両委員ハ四月三日英国首相ヲ往訪シ本問題從來ノ曲折ヲ詳説シタル上「ヒューズ」氏ヲ勧誘シテ刻下ノ行詰ヲ解説スル様其尽力ヲ請ヒタルニ同相ニ於テモ我主張ニ対シ賛成ノ意ヲ表シ加奈陀及南阿首相ト協議ヲ重ネタル上充分尽力相試ムベキ旨ヲ約諾

シタリ爾来本委員等ニ於テモ亦直接ニ右両相並ニ已ニ帰仏ノ「スマッツ」氏等ト会商數回ニ及ビタルモ彼等ノ尽力モ「ヒューズ」ヲ動かスニ至ラズ一面牧野委員ハ「スチード」氏ヲ説キ「タイムス」ノ勢力ヲ利用シテ「ヒューズ」氏ノ反省ヲ促サシムル等各般ノ手段ヲ尽シテ局面ノ展開ニ努メタルニ拘ラズ「ヒューズ」氏ノ周囲ニハ一団ノ強硬論者蟠居シテ万一日本ノ要求ガ容レラルルガ如キ場合ニ於テハ濠洲全委員ハ断然巴里ヲ撤退スベシトノ決意ヲ為スニ至リタルヤニ仄聞セリ現ニ四月十一日南阿首相「ボータ」將軍カ牧野ニ向ヒ嚴ニ貴我間ノ極秘ナルガ「ヒューズ」ハ狂人ナリト称スルノ外ナシ云々 (strictly between ourselves, I think he is mad) ト述懐シタル所ヨリ察スルモ此間ノ消息ヲ知ルニ難カラズ此事情ニ顧ミ妥協ノ絶望ナルコト最早疑ヲ容レザルト同時ニ一面聯盟委員會ノ議事着々進行シテ四月十一日ノ会合ヲ以テ規約全部ヲ議了スベキ形勢ナリシヲ以テ不得止愈々我提議ヲ提出スル事ニ決定スルニ至レリ尚此間本委員等ハ説明ノ為今一応「ヒューズ」ニ面会ヲ求メタルモ病氣ノ故ヲ以テ辞シタリ然ルニ昨十一日ノ總會ニハ出席シ居リタルヲ視レバ多分避ケタルモノト認ム濠洲ニ

於ケル本人ノ位地ハ近頃動搖シ内閣ノ維持困難ナル際日本ノ提議ニ同意スル時ハ遠カラザル総選挙ニ於テ反対党ニ利用サルコトヲ恐ルル結果頑強ニ反対ヲ固執スル所以ナルコトハ各方面ノ聞込一致スル所ニ有之英国政府モ濠洲ノ戰爭中ニ於ケル功績ニ顧ミ手控スル事情モアリ又「ヒューズ」ノ為人大局ヲ觀ル政治家ニアラズ全ク労働党ノ首領ニ相応セル人物ニシテ此人ヲ對手トシタルハ本件交渉上少カラザル不便ヲ覚エタリ之ニ反シ「スマッツ」「ボータ」(南阿) ボルデン(カナダ) 等ハ誠意ヲ以テ「ヒューズ」ヲ説得シ本件ヲ纏ムルコトニ努メタルコトハ多トスル所ニ有之右御参考マテ申添フ
英米伊ヘ電報セリ

註 本電報ヲ起草シタルハ四月十二日ナルモ發電ハ翌十三日トナレリ

四〇六 四月十三日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種差別撤廃ノ原則ヲ聯盟規約前文ニ挿入スル我方提案ガ委員會ニ於テ不成立トナリタル經過報告ノ件

別電 四月十四日松井大使宛内田外務大臣宛講第五七

九号

牧野委員陳述ノ我提案趣旨

講第五七八号

(四月十五日接受)

國際聯盟規約前文ニ挿入スヘキ我案文ニ関スル英國側トノ交渉ノ成行ハ往電講第五五六号ノ通ナルモ飽ク迄我主張ヲ宣明シ置ク為四月十一日夜最終ノ委員会ニ於テ規約案各条ノ討議ヲ畢リ(別電講第五五九乃至五七〇号)前文ノ討議ニ戻ルヲ俟チ by the endorsement of the principle of equality of nations and just treatment of their nationals ノ案文ヲ提議シ先ツ牧野委員ヨリ別電第五七九号ノ通陳述シタルニ之ニ対スル「セシル」卿所説ノ大要ハ此ノ如キ文句ヲ挿入スルハ全ク無意味ナルガ如ク若シ何等意味アリトセハ重大ナル反対アルヲ免レズ抑外國人ノ入国ニ関スル問題ハ全然内国問題ナリ各国民ノ平等主義ハ固ヨリ自分ノ賛成スル所ナルモ之ヲ規約中ニ挿入スルトキハ延テ婦人問題(前日ノ會議ニ於テ女權運動者ノ希望ヲ聴取シタリ)ニ関スル規定等ヲモ挿入セザルベカラザルニ至ルベク此種ノ問題ハ事体上國際聯盟確立後ノ活動ニ俟ツベキモノナリ日本

ハ何等特殊ノ義務ヲ課スルモノニ非ズト述ヘ支那委員モ亦我提案ニ賛成ノ趣旨ヲ述ベタリ

波蘭「ドモスキ」氏ハ本案ハ主義上反対セザルモ規約条文中何等規定ナキ事項ニ関シ前文ニ原則ヲ掲クルカ如キハ規約ノ構成上反対セザルヲ得ズトノ反対意見ヲ述ヘ牧野委員ハ前文ハ大体ノ精神ヲ掲ケタルモノニシテ必ズシモ各条項ノ規定ヲ予示スルモノニ非ズト反駁シ最後ニ「ウィルソン」大統領ハ本件ハ平靜ニ取扱フヘキ問題ニシテ總會會議ニ於テ論議スルコトハ之ヲ避ケタシト述ヘタリ於是牧野全權ヨリ本問題ニ関スル會議ノ意向ヲ知ル為賛否ヲ問ハレタキ旨ヲ述ヘ大統領ハ我提案賛成者ニ挙手ヲ求メタルニ議長以外ノ出席者十六名中十一名之ニ応ジタリ即チ仏國委員二名伊國委員二名希臘支那セルビヤ葡萄牙「チエックスロヴァック」及我全權二名之ナリ賛成ヲ表セザリシモノハ英、米、波蘭、「ブラジル」、「ルーマニヤ」ノ各委員五名トス是ニ於テ大統領ハ本件提議ハ全会一致ヲ得ザルニ依リ不成立ト認ムルノ外ナシト述ヘ之ニ対シ此マテ會議ノ問題ニ付テハ多数決ニ依リテ決定シタルコトアリト牧野委員ヨリ大統領ノ注意ヲ促シ又他委員ヨリ多数ニテ聯盟所在地ヲ「ゼ

ガ現ニ聯盟ニ於テ五大國ノ班ニ列スルノ事實ニ鑑ミ待遇ノ優劣ハ本聯盟ニ関スル限り問題トナラズ云々ノ点ニ在リ之ニ対シ牧野珍田両委員ニ於テ数次補足又ハ弁駁ヲ試ミタル末「ウィルソン」氏ハ議場ニ向ヒ意見ノ陳述ヲ求メタルニ第一伊國「オルランド」氏ハ日本ノ提案ハ吾人ノ向ハムトスル理想ヲ表明スルモノニシテ苟クモ此ノ如キ提議ニ対シテハ何人ト雖モ之ニ同意ヲ表セザルヲ得ザルベシトテ賛成ノ意ヲ表シ次テ仏國「ブルジョア」氏ハ全然「オルランド」氏ト同意見ニシテ本件ノ主義ニ対シテハ反対スルノ余地無シト述ヘ同シク仏國「ラルノー」氏モ日本ノ新提案ハ原則ヲ記述スルモノニシテ何等直ニ実行ヲ要求スルモノニ非ズ隨テ之ニ同意ヲ表スルニ何等困難アルコト無シト云ヒ希臘「ヴェニゼロス」氏ハ自分カ曩ニ宗教及人種ニ関スル提議ハ共ニ規約ヨリ取り除クヲ適當トスヘシトノ意見ヲ表示シタル為日本ノ最初ノ提案ハ不成立ニ至リタルモノニシテ右日本ノ提案ニ対シテハ天下周知ノ困難アリタルモ今回ノ提議ハ全然趣ヲ異ニシ各国民平等ノ主義ヲ表明スルモノニシテ之ニ反対スルヲ得ズ日本ハ聯盟ノ一員タルノミナラズ大國ノ地位ヲ占ム而シテ牧野男ノ宣言ニ依ルモ本提案

ネヴァ」ト決シタルニ非ズヤトノ陳述出デタルモ大統領ハ本件ノ如キ重要ナル事項ノ決定ニ付テハ從來共全会一致少クトモ反対者ナキヲ要スルノ趣旨ニ依テ本委員會ノ議事ヲ取扱ヒ来レル旨ヲ説明セリ

最後ニ牧野委員ハ日本ハ其ノ主張ノ正当ナルヲ信ズルカ故ニ機會アル毎ニ本問題ヲ提起セザルヲ得ズ又本夕自分等ノ為セル陳述及賛否ノ數ハ之ヲ議事録ニ掲ゲラレタシト述ヘ大統領ハ其ノ旨ヲ諒承セリ

要スルニ当夜ハ一般ニ我主張ノ極メテ穩当ナルヲ認メ「セシル」卿ノ所述モ何等首肯スルニ足ルモノ無ク寧ロ一種板挾ミノ境遇ニ立チタル苦衷ヲ表白セルノ感ヲ懷カシメタリ又米國委員ニ於テハ英國側ノ同意ヲ得隨ツテ本件ノ為激烈ナル政論ヲ惹起セザルベシトノ予想ヲ以テ我提議賛成ノ一条件トシタルハ内交渉ノ曲折ニ照ラシ否ムベカラザル事實ナリト雖モ已ニ一旦我主張ニ対シテ主義上ノ同意ヲ与ヘタル今日ニ於テ其態度ヲ豹変スルノ苦境ハ之ヲ看取スルヲ得タリ「セシル」卿ノ如キモ裏面ニ於テハ殖民地側トノ妥協ヲ求ムル為自ラ相當ノ尽力ヲ試ミタル事實ハ既報ノ通ニシテ要スルニ英米側ニ在リテハ内心我立場ヲ諒トシ乍ラ各々

其国情ニ顧慮シ表面上反對ヲ表セザルヲ得ザル極メテ困難ノ地位ニ在リタルコトハ會議ノ席上ニ於ケル大統領「ハウス」大佐及「セシル」卿ノ態度ニ徴シテモ之ヲ看取スルヲ得タル所ニシテ此ノ辺ノ事情ハ本件全体ノ成行ヲ判断スルニ方リ留意スヘキ事情ト思考ス

(別電)

四月十四日松井大使宛内田外務大臣宛講第五七九号

牧野委員陳述ノ我提案趣旨

講第五七九号

I have already had occasion to bring up this subject before the committee, but it was in another form and with a different meaning. The subject is a matter of such a great moment and concern for a considerable part of mankind and especially to the nation I represent, that I deem it my duty to present it again for your consideration. My reasons having already been set forth on a previous occasion, I shall now be as brief as possible.

This league is intended to be a world instrument

alties, there exist the wrongs of racial discrimination which was, and is, the subject of deep resentment on the part of a large portion of the human race. The feeling of being slighted has long been a standing grievance with certain peoples. And the announcement of the principle of justice for peoples and nationalities as the basis of the future international relationship has so heighedened their legitimate aspirations, that they consider it their right that this wrong should be redressed.

It must be admitted that it has been possible to bring this work to this advanced stage, because the prevailing world opinion has backed different governments to work it out, and that the enduring success of this undertaking will depend much more on the adherence and espousal of the noble ideals set forth in the Preamble by the various peoples concerned than on the support or acts of respective governments that may change from time to time. These peoples constituting the States Members must be the future Trustees of this work, and their close

for enforcing righteousness and defeating force. It is to be the highest Court of Justice. It will, besides providing for social reforms, also look after the welfare and interests of the less advanced peoples by entrusting their government to mandatory States. It is an attempt to regulate the conduct of nations and peoples toward one another according to a higher moral standard than has obtained in the past, and to administer fairer justice throughout the world. These ideas have touched the inmost human soul and have quickened the common feelings of different peoples scattered over the five continents. It has given birth to hopes and aspirations, and strengthened the sense of legitimate claims which they consider as their due.

The sentiment of nationality, one of the strongest human feelings, has been aroused by the present worldwide moral renaissance, and is at present receiving just recognition in adjusting international affairs. In close connection with the grievances of the oppressed nation-

harmony and mutual confidence are necessary for insuring such success.

Believing these conditions to be indispensable, I think it only reasonable that that principle of equality of nations and the just treatment of their nationals should be laid down as a fundamental basis of the future relationship in this world organization. If this reasonable and just claim is now denied, it will, in the eyes of these peoples with reason to be keenly interested, have the significance of a reflection on their quality and status. Their faith in the justice and righteousness which are to be the guiding spirit of the Covenant may be shaken.

Such a frame of mind may, it is to be gravely feared, lead to their unwillingness and reluctance to carry out obligations such as military contribution, which certain emergency, foreseen in different articles, may require. A most deplorable situation may thus be created. Now that the world is to move on a higher plane of international political life, it would not be easy for people

to reconcile themselves to an idea of submitting to a call for heavy and serious obligations, perchance in defence of those at whose hands they are refused a just treatment. Such a contingency must be borne in mind, for pride is one of the most forceful and sometimes uncontrollable causes of human action.

I state in all seriousness, that although at this particular center of political life, the practical bearing of such a dangerous development of the question may not at this moment be properly realised, I, for one, entertain much anxiety about the possible future outcome of this question.

My amendment to the Preamble is simply to lay down a general principle as regards the relationship at least between the nationalities forming the League, just as it prescribes the rules of conduct to be observed between the Governments of the States Members.

It is not intended that the amendment should encroach on the internal affairs of any nation. It simply

sets forth an aim in the future international intercourse. The work of carrying out this principle comes within the indisputable competence of the proper authorities. This amendment does not fully meet our wishes, but it is an attempt to conciliate the viewpoints of different peoples, the result arrived at after a thorough and mature consideration of varied aspects and realities of the present international relations. Matsui.

英米伊ハ転電セリ

四〇七 四月二十三日

在シドニー清水総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種の平等ノ要求ヲ拒マレタルニ付東亜モン
ロー主義ヲ創立スベシトノ日本新聞ノ主張ニ
関スルシドニー新聞ノ社説報告ノ件

第四八号

(四月二十四日接受)

「シドニー・モーニング・ヘラルド」ハ四月二十二日『日本及「モンロー」主義』ト題スル社説ヲ掲ケ大要左ノ通り
論述セリ

東京ヨリノ電報ニ拠レバ日本ガ講和會議ニテ人種の同等ノ

要求ヲ拒マレタルニ就テハ日本新聞中日本ハ国際聯盟ヲ脱シ東亜ニ対スル「モンロー」主義ヲ創立スベシト主張スルモノアリ又日本ノ一新聞ハ該人種問題ニ就キ英国ガ終ニ濠洲ノ主張ニ聽従シタルヲ責メタリト言フ本問題ニ関シ濠洲首相ノ言動ガ機宜ヲ失セシヤ否ヤハ別問題トシ日本修正案不通過ノ責ヲ全然「ヒューズ」氏ニ帰スルハ明ニ不公平ナリ現ニ英国政治家ノ一人ハ移住ノ自由權ヲ聯盟協約中ニ挿入スルハ聯盟ノ範圍外ニ出ヅルモノナリト言明シタル事実アルヲ記憶セヨ之該件ハ内治權ノ干渉ニシテ聯盟主唱者ノ予期セザルトコロナレバナリ猶太人ノ主張セル信仰自由權ニ関スル要求ニ就キテモ亦然リ云々東亜ニ対スル「モンロー」主義ノ創立ハ頗ル重大ナル新聞問題ナリ「モンロー」主義ニ就イテハ從來多大ノ誤解アリ日本新聞主張ノ該主義ノ定義ヲ明ニセザレバ其政策ガ聯盟協約ノ主義ト抵触セザルヤ否ヤヲ明言シ難キモ從來日本新聞及政論家ノ主張ヨリ判斷スルニ支那ニ於テ日本ノ paramountcy ノ創立承認ヲ以テ主ナル目的トスルガ如シ若シ日本ノ目的茲ニ在リトセバ重ネテ失望ニ終ラム事ヲ虞ル目下巴里ニ会合セル大国民ハ支那及其友邦ニ対シ grossly unfair ナル日本ノ要求ヲ承認

スル能ハザルヘシ元來米國ノ米大陸ニ対スル「モンロー」主義ハ他國ニ対スル宗主權ヲ求メタルニ非ズシテ他國ノ弱國侵略ヲ防グニ在リ若シ日本ノ主張セムトスル所此原義ニ基クナラバ国際聯盟ハ之ガ考量ノ余地アルベキモ二三年來日本ノ政論家ノ主張セル東亜「モンロー」主義ハ大統領「モンロー」氏ノ設定シタル主義ト柄鑿相容レザルモノナリ云々

又「シドニー・デーリー・テレグラフ」ハ同日ノ社説欄ニ左ノ短評ヲ掲ゲタリ

「モンロー」主義ハ屢々濫用セラレタル政治用語ノ一ニシテ「ヒューズ」氏ガ太平洋諸島ニ対シテ設定セムトシ日本カ東亜ニ於テ設定セムトスル所モ等シク「モンロー」主義ノ原義ニ違ヘリ日本ハ其産業軍備文明及地理的地位等種々ノ優秀ヲ主張シ其地理的優越ハ千九百十七年日米協約ニテ承認セラレタリ然シナガラ日本ハ專制的侵略ニ対シ亜細亞諸國ヲ保護スルコトヲ要求セルニ非ズ千九百十五年提出セル日本ノ「デマンド」ハ支那ノ主權ニ重大ナル侵蝕事項ヲ包含セリ即或地域ハ殆ド全ク日本管理ノ下ニ置カレ或地域ハ日本以外他國ノ企業ヲ除外シ支那ノ外交政策ハ日本人

顧問ニ依リ裁定セラルベキ趣向ナリキ「モンロー」主義ハ門戸開放領土保全ナル米国政策ニ依リ代表セラレタルモ日本ノ提議中ニハ何等右様ノ主義ヲ有セザリキ要スルニ支那ノ将来ハ独逸ト講和後列強ガ調停セザルベカラザル最急問題ノ一ツナリ云々

英仏へ電報セリ

四〇八 四月二十五日

内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛(電報)

人種差別撤廃期成同盟会第三回大会ノ人種差別撤廃ヲ認メザル国際聯盟ニ不加盟ノ決議等

通報ノ件

講第二九一号

(一)竹田宮恒久王殿下四月二十三日御薨去遊ハサレ同三十日豊島カ岡御陵地ニ於テ御葬儀執行セラルル筈ニ依リ四月二十九日御挙行ノ御予定ナリシ皇太子殿下御成年式延期セラル尤モ宮中喪ハ四月二十三日ヨリ二十五日迄
(二)各政党新聞記者及其ノ他一般有志ヨリ成人種差別撤廃期成同盟会第三回大会ハ四月二十四日帝國ホテルニ於テ開催、来会者二百余名、満場一致ヲ以テ「日本国民ハ人

種の差別待遇撤廃ヲ認メサル国際聯盟ニ加入セズ」ト

ノ決議案ヲ可決シ次テ有志数名ノ演説アリタルガ仏国文学博士「ポール、リシャル」氏ハ須ク日本ハ正義人道ヲ基礎トセル国際聯盟ヲ唱道スヘク亜細亜ニ奴隸国ノ一國タリトモ存スル間ハ真ノ聯盟ハ得テ之ヲ望ムベカラズ日本ハ率先シテ亜細亜ニ真ノ自由聯盟ヲ作ルヘシ」ト論シ箕浦勝人氏ハ大隈侯ノ意見書ヲ代読シタルガ要旨ハ「正義人道ヲ無視セル国際聯盟ニハ断然加盟セサルヲ可トス吾人ハ永久ノ平和ノ為ニ世界有識者ノ覚醒ヲ促スト共ニ講和會議ニ於ケル列強ノ使臣ノ賢慮ニ訴ヘ且我が使臣ノ奮勵ヲ希望ス」ト言フニ在リキ尚同会ハ該決議ノ実行ヲ実行委員ニ附託セリ

四〇九 四月二十八日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

四月二十八日第五回總會ニ於ケル牧野委員

ノ人種の差別問題ニ関スル演説報告ノ件

別電 同日松井大使宛内田外務大臣宛講第七六七号

右演説

講第七六九号

四月二十八日第五回總會ニ於テ牧野委員ノナシタル演説別電講第七六七号ノ通

(別電)

四月二十八日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報講第七六七号

四月二十八日總會ニ於ケル牧野委員ノ人種の差別問題ニ関スル演説

講第七六七号

I had first on the 13th of February an opportunity of submitting to the Commission of the League of Nations our amendment to the Covenant, embodying the principle of equal and just treatment to be accorded to all aliens who happen to be the nationals of the States which are deemed advanced enough and fully qualified to become members of the League, making no distinction on account of race or nationality.

On that occasion I called the attention of the Commission to the fact that the race question being a standing grievance which might become acute and dangerous

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 四〇九

at any moment, it was desirous that a provision dealing with the subject should be made in this Covenant. We did not lose sight of many and varied difficulties standing in the way of a full realization of this principle. But they were not insurmountable, I said, if sufficient importance were attached to the consideration of serious misunderstandings between different peoples which might grow to an uncontrollable degree, and it was hoped that the matter would be taken in hand on such opportunity as the present, when what had been deemed impossible before was about to be accomplished. Further, I made it unmistakably clear that the question being of a very delicate and complicated nature, involving the play of a deep human passion, the immediate realization of the ideal equality was not proposed, but that the clause presented enunciated the principle only, and left the actual working of it in the hands of different Governments concerned, that, in other words, the clause was intended as an invitation to the Governments and peoples

五〇五

concerned to examine the question more closely and seriously, and to devise in a fair and accommodating spirit means to meet it.

Attention was also called to the fact that the League being, as it were, a world organization of insurance against war ; that in cases of aggression nations suitably placed must be prepared to defend the territorial integrity and political independence of a fellow member ; that this meant that a national of a state member must be ready to share military expenditure for the common cause and, if needs be, sacrifice his own person. In view of these new duties, I remarked, arising before him as a result of his country entering the League, each national would naturally feel, and in fact demand, that he be placed on an equal footing with the people whom he undertakes to defend even with his own life. The proposed amendment, however, was not adopted by the Commission.

On the next day, that is, on the 14th of February

Now that it has been decided by the Commission that our amendment, even in its modified form, would not be included in the draft Covenant, I feel constrained to revert to our original proposal and to avail myself of this occasion to declare clearly our position in regard to this matter.

The principle we desire to see acted upon in future relationship between nations was set forth in our original amendment as follows :

“The equality of nations being a basic principle of the League of Nations, the High Contracting Parties agree to accord, as soon as possible, to all alien nationals of States Members of the League equal and just treatment in every respect, making no distinction, either in law or in fact, on account of their race or nationality.”

It is our firm conviction that the enduring success of this great undertaking will depend much more on the hearty espousal and loyal adherence that the various

when the draft Covenant was reported at a plenary session of the Conference without the insertion of our amendment, I had the privilege of expressing our wholehearted sympathy and readiness to contribute our utmost to any and every attempt to found and secure an enduring peace of the world. At the same time, I made a reservation that we would again submit our proposition for the consideration of the Conference at an early opportunity.

At the meeting of the Commission of the 11th of April, I proposed the insertion in the Preamble of the Covenant a phrase endorsing the principle of equality of nations and the just treatment of their nationals. But this proposal again failed to be adopted by unanimity, although it obtained, may I be permitted to say, a clear majority in its favour.

This modified form of amendment did not, as I had occasion already to state at the Commission, fully meet our wishes, but it was the outcome of an attempt to conciliate the viewpoints of different nations.

peoples concerned would give to the noble ideals underlying the organization, than on the acts of the respective governments that may change from time to time. In an age of democracy, peoples themselves must feel that they are the trustees of this work, and to feel so, they must first have a sure basis of close harmony and mutual confidence.

If just and equal treatment is denied to certain nationals, it would have the significance of a certain reflection on their quality and status. Their faith in the justice and righteousness which are to be the guiding spirit of the future international intercourse between the members of the League may be shaken, and such a frame of mind, I am afraid, would be most detrimental to that harmony and cooperation, upon which foundation alone can the League now contemplated be securely built. It was solely and purely from our desire to see the League established on a sound and firm basis of good-will, justice and reason, that we have been compelled to make our pro-

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 四一〇

posal. We will not, however, press for the adoption of our proposal at this moment.

In closing, I feel it my duty to declare clearly on this occasion that the Japanese Government and people feel poignant regret at the failure of the Commission to approve of their just demand for laying down a principle aiming at the adjustment of this long standing grievance, the demand that is based upon a deep-rooted national conviction. They will continue in their insistence for the adoption of this principle by the League in future.

四一〇 四月二十九日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種的差別撤廃規定問題ヲ總會議ノ投票ニ附

セザリシ理由報告ノ件

講第七七五号

往電講第四四二号乙ヲ規約前文中ニ挿入セシムルノ案ハ四月十一日夜ノ最終委員会ニ於テ遂ニ否決セラルルニ至リタル次第ハ往電講第五七八号ヲ以テ既ニ具報ニ及ヒタル通ナル処更ニ之ヲ總會議ニ提出シテ兎モ角一般ノ投票ニ附スル

註 本電ハ松井大使ヨリ在英、米、伊大使ヘ転電セラレタリ

四一一 五月一日

在伯国堀口公使ヨリ
内田外務大臣宛

巴里講和會議ニ於ケル人種平等問題ニ関スル

伯国委員ノ態度ニ関スル件

政公第四二号

(七月七日接受)

大正八年五月一日

在伯 特命全權公使 堀口九万一(印)

外務大臣子爵 内田 康哉殿

過般当国大統領補欠選挙ノ際政府側ニ属スル政治家ノ多数ハ目下巴里講和會議ニ於ケル伯国委員長「エピタシオ、ペッソア」氏ヲ推シテ之ニ投票シタルカ為大多數ニテ当選シタルヲ見ルヤ之カ競争者タル「ルイ、バルボザ」氏ノ率ユル所謂民党派ハ如何ニカシテ「ペッソア」氏ノ大統領就任ヲ妨害シ又ハ之ヲ困難ナラシメント企テ連日來種々ノ口実ノ下ニ百万方之ヲ攻撃シ居タリシカ一二週間前ヨリ偶然巴里會議ニ於ケル人種平等問題投票ノ際伯国委員ハ米國ノ意嚮ニ迎合シテ日本ノ提案ニ反対ノ投票ヲ為シタリトノ風説当地ニ伝ハルヤ民党側ハ之ヲ以テ奇貨措クヘシトナシ盛ニ

五 巴里講和會議ニ於ケル人種差別撤廃問題一件 四一一

五〇八

コトハ必スシモ不可能ニアラサルモ既ニ英米兩國ノ反対アル以上本案ノ成効絶對ニ望ナキノミナラス最終委員会ニ於テ我提案ニ賛成セル諸国殊ニ小國中ニハ英米ノ強硬ナル反对ニ考ヘ總會議ニ於テ其態度ヲ豹変スルモノアルヘキハ諸般ノ形勢ニ顧ミ想像ニ難カラサル所ナリ從テ投票ノ結果ハ委員会ニ於ケルト反対ニ極メテ少数ノ賛成者ヲ得ルニ過キサルノ不利ヲ見ルノ虞アルノミナラス投票ヲ求ムルトスレハ從來ノ行掛上前文挿入ノ案ニヨルノ外ナキ処右ハ御承知ノ通り妥協ヲ求ムルカ為ニ極度ノ譲歩ヲナシタル不満足ノ案ナルカ故ニ帝國ノ立場ヲ明白ニシ後日ノ地歩ヲ確保セムカ為ニハ寧ロ從前ニ遡リ当初ノ提案ヲ繰返シテ単ニ我方趣旨ノ存スルトコロヲ充分明白ナラシムルノ措置ヲ執ル方有利ナリト認メタリ

依テ今回ノ總會議ニ於テハ貴電講第二一四号(三)ノ御趣旨ニ基キ貴電講第二〇九号所載ノ三案中何レカニヨリ措置スヘキ処第一案及第二案ハ往電講第五〇七号ヲ以テ具報ニ及ヒ置キタルカ如キ事情ニテ実行不可能ナルニ付已ムヲ得ス第三案ニヨリ往電講第七六七号ノ演述ヲ為シ其全文ヲ「プロトコール」ニ採録セシムルコトニ取計ヒタル次第ナリ

「ペッソア」氏ヲ非難攻撃セリ且當時右ノ風説ハ啻ニ民黨側ノ新聞紙ノミナラス政府党ノ新聞紙迄モ亦同シク之ヲ掲載セリ

サレハ遠カラス伯国大統領タルヘキ「エピタシオ、ペッソア」氏其人ニシテ現ニ伯国ニ於テ行ハレツツアル人種平等待遇ニ反対シタル意見ヲ抱懷スルトセンカ年々多數ノ移民ヲ送リツツアル我國ニ他日或ハ何等影響ヲ及ホスコトナシトモ限ラレスト懸念致サレ候ニ付去二十三日水曜日外務大臣通常會見ノ節巴里會議ニ於テ人種同等問題ニ関スル投票ノ際貴國委員長「エピタシオ、ペッソア」氏ハ之ニ反対ノ投票ヲ為シタル趣ナルカ右ハ如何ナル故ニヤト相尋候処外務大臣ハ右ニ関シ本省ヨリハ何等ノ訓令ヲ發シタルコトナク又先方ヨリ未ダ何等ノ報告ニ接セサルヲ以テ其詳細ヲ知ルニ由ナキモ元來伯國ハ各人種ノ待遇ニ関シ何等ノ差別ヲ設ケス我委員カ反対シタリト伝ハラルル所ノモノハ多分人種問題夫レ自身ニ反対セシニハアラスシテ此問題ヲ國際聯盟ノ議題トセスシテ之ヲ各國間ノ協定ニ任スヘシトナシ其意見ヲ發表シタルニ起因スルモノナランカト想像セラル伯國政府ハ決シテ異人種排斥ノ意思ナク各人種トモ無差別同

五〇九

等ニ之ヲ待遇スルコト現ニ歐亞各国移民ノ自由來伯ニ何等ノ制限ヲ置カサルニ見テモ明ナル所ニシテ且今後モ決シテ然ルコトナシト明言セリ依テ不取敢右大体ハ四月二十四日發往電第一六号ヲ以テ達貴閣置候

然ルニ當時民黨側ハ或ハ新聞紙上ニ於テ或ハ會合ヲ催シテ盛ニ在巴里伯國委員ノ行動ヲ非難シ之レ伯國國民一般ノ思想感情ト全ク反對セル行動ナリト云ヒ又ハ之レ伯國ノ風俗習慣伝説歴史及伯國憲法ノ精神ヲ没却スルモノナリト叫ビ或ハ又正義自由平等人道等ノ各方面ヨリ論斷シ人種平等待遇ニ反對シタル伯國講和委員長「エピタシオ、ペッソア」ニ向ッテ伯國國民ハ挙テ之ニ絶交書ヲ渡スモノナリト絶叫シ甚シキニ至リテハ「ペッソア」氏ハ伯國人民ノ委員ニアラスシテ単ニ外務大臣「ダガマ」氏ノ密使ニ過キス而シテ「ダガマ」氏其人ハ北米ノ政治的奴僕ナリト罵倒ヲ極ムルニ至レリ蓋シ現外務大臣ハ米國ニ大使タルコト九年ニ及ヒ且其夫人カ米國人ナルノ故ヲ以テ常ニ米國拝崇者トシテ伯國人ノ指斥ヲ受クル所ニシテ而シテ之レ氏ノ最苦痛トスル所ナリ之レ反對黨カ特ニ其急所ヲ衝キシ所以ナリ言フ迄モナク之等ノ議論ハ辭ヲ人種平等問題ニ藉リテ実ハ

而シテ右ノ提議ハ大多數ヲ以テ可決セラレタルモ委員會ノ満場一致ヲ要ストノ規定ノ下ニ法案トシテ採用ニ至ラサリキ

当地ニ於ケル新聞ハ何レモ自分カ反對投票ヲ為シタリト伝フルモノナシ」

政府黨新聞ハ之ニ附記シテ吾人カ右ノ電文ヲ繰返シ發表シタルハ二三ノ新聞紙カ人種問題ノ何物ナルカラモ深ク研究スルコトナク單ニ坊間伝フル風説ニ基キ而モ他ニ為ニセントスル所アリシカ為ニ当初ヨリ日本及支那ト共ニ人種平等問題ニ賛成ヲ表シ曾テ其態度ヲ變シタルコトナキ「エピタシオ、ペッソア」氏ノ行動ヲ中傷シタルモノナルコトヲ明ニセンカ為ナリ

右ノ電報ノ發表セラレタル以上我特派大使ノ「反對投票」會合ハ全ク理由ナキモノト云フヘシ

茲ニ至リテ民黨側ノ非難ハ全ク掃尽セラレタリ其次ノ通常會見日四月三十日重ネテ外務大臣ヲ訪ヒシ際大臣ハ微笑ヲ浮ヘテ前掲伯國委員長ヨリノ巴里來電新聞切抜ヲ示シテ既ニ御承知ノ通り伯國委員ハ曾テ日本ノ提案ニ反對シタル事ナカリキ又無キ筈ナリト語レリ

其反對黨ナル政府側ノ推薦ニ係ル大統領候補者「エピタシオ、ペッソア」氏ヲ攻撃シタルモノニシテ真ノ目的ハ人種問題以外ニ在リテ所謂敵本主義タルヤ勿論ナリ物論ヲ釀スルコト如此ナルヲ見テ外務大臣ハ俄ニ巴里ニ電報ヲ發シテ人種平等問題投票ニ関スル詳細ヲ徵シタルモノト見エ四月二十七八日ノ当地新聞紙ハ執レモ左ノ外務省公報ヲ掲載セリ

人種平等問題

(四月二十八日ノティンヤ掲載)

四月二十五日附ヲ以テ上院議員「エピタシオ、ペッソア」氏ハ巴里ヨリ外務大臣宛電報ヲ以テ大要左ノ如キ報告ヲ為シタリ

「日本ノ提議カ最初國際聯盟委員會ニ提出サレタルハ二月十三日ノ會議ニシテ其際之ニ賛成投票ヲ為シタルモノハ日本伯國及支那ノミナリキ其後四月ノ最終會議ニ先チ再ヒ提出セラレタル際ハ日本、希臘、スロバキア、ポルトガル、セルビア、支那、伯國、ルーマニア、ポロニア、伊國及仏國之ニ賛成シ英米ノ二國ハ之ニ反對投票ヲ為シタリ白耳義ハ其委員欠席ノ為メ投票セス

右及報告候 敬具

註 四月十一日ノ國際聯盟委員會ニ於ケル伯國委員ノ態度ニ付テ

ハ前掲松井大使四月十三日發講第五七八号電報(四〇六文書)

参照

四二二 五月八日 在中國小幡公使ヨリ
内田外務大臣宛

人種の差別撤廃ニ関スル石井大使ノ演説ガ米
国上院ノ討議ニ及ボセル悪影響ヲ報道セル新
聞記事報告ノ件

附屬書 五月八日發行「ノース、チャイナ、スター」記
事切抜

公第一七八号 (五月十四日接受)

大正八年五月八日

在支那 特命全權公使 小幡 西吉(印)

外務大臣子爵 内田 康哉殿

今五月八日ノ「ノース、チャイナ、スター」ハ石井大使ノ人種差別撤廃問題ニ関スル演説カ米國上院ノ國際聯盟問題ニ対スル討議ニ及ホセル影響云々ニ関スル同紙華盛頓通信員「フォックス」ノ三月二十二日附通信ヲ掲載致居候ニ付

御参考迄右別紙切抜致ニ及御送付候間御查收相成度此段及報告候也

(附屬書)

五月八日発行「ノース・チャイナ・スター」記事切抜

North China Star

Indiscreet Ishii Is Feeling Discomfort

.....

Now Regrets His Remarks On League Of Nations—Wishes He Had Observed Silence

BY ALBERT W. FOX

.....

Washington Bureau

Munsey Building

March 22, 1919.

Viscount Ishii, the Japanese Ambassador, is unfortunately in rather uncomfortable position here on account of recent efforts to explain Japan's stand with regard to the league of nations. He finds himself now in the position of the diplomat who remembers that one of the

mottos of his training is to hear much and say little, excepting to his own government. The distinguished Japanese diplomat would give a great deal if he had not ventured on the seas of publicity at this critical time. This is all the more remarkable because Viscount Ishii has consistently been so discreet.

First the Ambassador made a speech in New York in which he said in effect that Japan must have racial equality in any league of nations. The Japanese delegates in Paris had said the same thing before and there was no new departure in the Ambassador's remarks and indeed he used tact in expressing his views. Not a few fully agreed with him. But the speech came at just the time when the opponents of the Wilson league were looking for ammunition and they pounced upon the Ambassador's remarks as a means of bringing up Japanese exclusion as a dominant feature of the league plan.

It happened that in the closing days of the senate debate the question of whether or not Japanese exclusion

was involved in the pact had been discussed, supporters of the President claiming that it did not figure at all while the opponents claimed that it did. Viscount Ishii's speech showed clearly that it was an important factor. Senators therefore freely expressed their views and the Administration was admittedly embarrassed. In other words, the Ambassador's speech won several hundred thousand votes at the very least for the opponents of the league.

But this first step of Viscount Ishii's was only the beginning of his troubles. He sought to correct the impression and—as is often the case in delicate situations—made matters distinctly worse. In an interview, he expressed regret that “the Republican Senators had misunderstood him”. This has nettled the majority party in Congress for two reasons. First it is an unwritten rule that no foreign Ambassador should engage in political discussions here or signal out Republicans or Democrats for criticism or comment. Secondly, the Senators claim

that no one could possibly have misunderstood what the Ambassador said and meant. The remark of Viscount Ishii was therefore considered as a gratuitous slap at the Republican party and a criticism of the intelligence of the particular Senators who expressed their views. Of course no one assumes that Viscount Ishii intended to nettle anyone. But it illustrates how very difficult it is for a diplomat to say anything about a situation which is merged in the internal politics of the country to which he is accredited. It seems that silence alone is golden in these cases.

四二三 六月二十九日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

米国大統領ガ人種問題ニ関スル日本ノ提案ニ

賛成セザリシ事情ニ付ハウス大佐内話ノ件

講第一四八七号(極秘) (七月二日接受)

「ハウス」大佐カ二十九日牧野全権ニ極秘トシテ内話スル所ニ依レン往電講第五七八号国際聯盟最終ノ委員会ニ於テ大統領ハ殆ト之ニ賛同スル決意ヲナシタリ御承知ノ通り委

員会ニ於テ大統領ハ自分ノ隣席ナリシカ英國側トノ一致ヲ破ルトモ致方ナキニ付人種問題ニ關スル日本ノ最終修正案ニ賛成ヲ表シ度キカ貴意如何ト私語シタルニ付自分ハ之ヲ止メタリ「ヒューズ」カ激烈ナル反對演説ヲ總會ニ試ミ大統領ヲモ攻撃スヘク其影響ハ米國ノ西部ノ輿論ヲ一層悪化シ或ハ大統領ハ終ニ之カ為メ *native* トナリ終ルモ知ル可カラスト云ヒタルニ彼ハ思ヒ止マリタルナリト

四一四 九月十六日 在シドニー玉木總領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種平等問題ニ付濠洲首相ノ平和會議ニ於ケル日本全權トノ交渉ニ關スル演説報告ノ件

第九〇号 (九月十八日接受)

九月六日濠洲首相「ヒューズ」氏ハ「シドニー」「タウンホール」ニ於テ平和會議ノ經過及其結果ニ付演説ヲ試ミタルカ人種平等問題ニ關スル日本全權トノ交渉ニ付左ノ如ク述ベタリ

人種平等問題ニ付先日聯邦議會ニ於テ為シタル報告中ニ於テサヘ述ヘサリシ一事ヲ玆ニ(脱)ソハ本問題ニ付日本代表者ニ対スル余ノ態度ノ「フエヤリー」ナリシコトニ在リ

ヲ有メ日本問題ニ対スル氏ノ態度ノ何処迄モ公明正大ナリシニ拘ラス日本代表カ氏ノ提言ヲ容レザリシハ日本ノ真意カ人種平等案ノ仮面ニ隠レ移民ヲ濠洲ニ送ラントセシニアリシコトヲ仄メカシ白濠主義維持上日本ノ野心ノ恐ルヘキヲ知ラシメ以テ自己ノ非ヲ覆ヒ曲却テ日本ニ在リシヲ説キ愚民ヲ惑ハシ次期総選舉ニ備ヘン為スカル演説ヲナシタルモノト思考セラルルガ「ヒューズ」氏ノ云ヘルカ如ク真ニ同氏カ我全權委員ニ対シ本案カ移民ニ關スル濠洲ノ権限ヲ

日本代表者ハ人種平等ノ条項ヲ國際聯盟規約中ニ挿入セシムヘキ理由トシテ本案カ単ニ主義及信條ノ宣言ニ止マルコトヲ以テセリ故ニ同案ノ數回修正セラレタル時余ハ最後ニ日本代表者ニ対シ『若シ貴下ニシテ人種平等案カ主義ノ宣言ニ止マリ移民問題又ハ移民ノ放逐ニ關スル吾人ノ權限ヲ制限スルモノニアラスト言明スルナラハ余ハ之ヲ國際聯盟規約中ニ挿入スルコトニ賛成スヘシ』ト述ヘタルカ日本代表者ハ余ノ意見ヲ容レサリキ本問題ニ付右ノ經過ヲ知ルトキハ濠洲ヲ愛スル我國民中一人タリトモ余ノ採リタル道ノ正シカリシヲ疑フモノナカラン云々

四一五 九月十六日 在シドニー玉木總領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

人種平等案ニ關スル濠洲首相ノ發表ヲ取消サシムルコトニ關シ請訓ノ件

第九一号 (九月十七日接受)

往電第九〇号ニ關シ

「Hughes」氏ハ濠洲人中人種問題ニ対スル氏ノ態度カ不必要ニ日本ノ反感ヲ買ヘリトノ意見ヲ有スルモノ多キヲ以テ之

制限スルニアラズト日本代表者ニ依リ声明セラルレハ國際聯盟規約中ニ挿入スルコトニ賛成スヘシトノ提言ヲ為シタリヤ疑ハザルヲ得ザレトモ兎ニ角同氏ハ右ノ如ク發表セルヲ以テ若シ(脱)適當ノ方法ヲ以テ同氏ノ言ヲ取消サシムルコト日濠關係上必要ト思考セラルルニ於テハ何分ノ義御回訓ヲ請フ